

徐京植著作目録

戸邊秀明・李杏理

《凡例》

- * 本目録は、徐京植が執筆した文献、あるいは発言が署名入りで発表された文献の書誌情報をまとめたものである。確認できた著作発表の期間は、1978年から2021年に及ぶ。
- * すべての文献を編年順で配列した。同一月発行の場合は、重要性の高いものから挙げた。
- * 各文献冒頭の01~12は発行月を表す。00は、発行月が不明の文献を表す。月日まで必要な場合は、掲載紙誌のタイトル・号数の後の丸括弧内に、(01.01) = 1月1日のように記した。
- * 各文献の性格の目安として、冒頭の【】に以下の分類を示した。また書誌事項に続く「*」以下で関連情報の補足に努めた。
【単著】【共著】【共編著】【共訳】【論考】【評論】【随想】【講演】【発言】【談話】【解説】
【書評】【短文】【詩】【対談】【座談会】【資料】
【短文】：参加記やアンケート回答、事務的な報告、編集後記、序跋等は、この分類に一括した。
【対談】：徐が聞き手となったインタビューについても、この分類に一括した。
- * [] 内は、無題の作品に対して、本目録作成者が仮に付けたタイトルであることを表す。
- * タイトル「 』『 』内の〈 〉は、その文献が掲載された紙誌で独自に設定された掲載欄の名称や、叢書やリレー連載の総題などシリーズ名を表す。また発行者名の直後に記した〈 〉は新書等の種類を表す。
- * 単著等の頁数については、本文頁だけでなく目次・索引頁も含めた総頁数を新たに算定して示した。
- * 雑誌等逐次刊行物については、編者と発行者が同じ場合は特に「編／発行」との記載は略した。新聞については発行者を略した（ただし、参考のために初出時のみ示した場合がある）。
- * 共著者・共編者、対談者・座談会出席者等については、書誌情報末尾の「*」以下に、徐京植本人を除く全員を挙げた。

- * 当該文献を実際に確認できなかった場合でも、再録先の注記から一定の情報が得られる場合は、末尾に「◆未見」等と付記した上で、可能な限りの情報を記載した。
- * 著者自身の単著への再録等については、「⇒」記号ののち、再録先書籍の発行年とタイトルで示した。連載の場合、初回の書誌事項の末尾に再録先を記し、以降の連載分については記載を省略したことがある。なお、一部を除いて、再録時の加筆等の詳細に関する注記は略した。
- * 文献の再録、あるいは単著の改版・翻訳版等については、「⇒」の後に再録先、もしくは翻訳版や新しい版の書誌情報を記した（特記なき場合、再録・改版時の改題はない）。ただし、大幅な増補が加わった新版の場合は、その発行年月に新たに書誌事項を起こした。また翻訳については、日本版が先に出版されている場合は日本版の書誌事項の後に「⇒」を付して韓国版の書誌事項を添えた。これに対して、韓国版が先に発行された場合には、日本版の書誌事項は韓国版と別個とし、その発行年月にそって、新たに書誌事項を起こした上で、「⇒」の後に韓国版・日本版の書誌事項を相互に参照できるように注記した。
- * 韓国語文献については、主要な著書や雑誌掲載の論考に限った。実際には、2000年代から韓国の新聞紙誌へ多くの文章を寄せているが、煩雑となることもあり、特に新聞への寄稿については記載できなかった（ただし、その主要なものは、日本版の単著に概ね集成されて、読むことができる）。なお、韓国で発表された文献の調査については、崔在赫氏のご助力を得た。記して御礼を申し上げる。
- * 記載漏れの文献が、なお相当数あると思われる。書評新聞や出版社等のPR誌、事典、各種ミニコミ、インターネット紙誌等への寄稿については、調査が行き届かなかった。特に、1970年代末～80年代における徐兄弟救援活動に関連する市民集会での講演記録や市民運動の紙誌への寄稿については、今回は詳しい調査ができなかった。この点をお詫びするとともに、今後も情報を補足し、時期を見て補遺を作成したいと考えている。ご批判とともに、脱漏している書誌について、御教示いただければ幸いである。
- * 最後に、著者である徐京植氏から、本目録作成の間、煩雑な照会にも丁寧にご回答をいただくだけでなく、貴重な文献をご提供いただき、文献の所在についても御教示をいただいた。記して感謝申し上げたい。もちろん、記載に関する過誤や不十分な点のいっさいは、戸邊・李の両者が責を負うものである。

1978年

- 05 【解説】「祖国の獄中で生きる兄たち：「手紙」の公表にあたって」、『世界』390号、岩波書店、pp.275～282 * 同号掲載「徐兄弟 獄中からの手紙」解説 ⇒ 1988『長くきびしい道のり』 pp.223～238

1979年

- 10 【随想】「故西村関一先生への手紙」, 『世界』407号, 岩波書店, pp.225~227 *投稿
⇒1988『長くきびしい道のり』 pp.192~197

1980年

- 10 【随想】「死者の重荷をとくために」, 呉己順さん追悼文集刊行委員会編・発行『朝を見ることなく：徐兄弟の母・呉己順さんの生涯』, pp.165~174 ⇒1981.10 現代教養文庫版, 社会思想社, pp.165~174 ⇒1988『長くきびしい道のり』 pp.177~187
- 12 【解説】「再び兄たちの手紙を公表するにあたって」, 『世界』421号, 岩波書店, pp.288~291 *同号掲載「獄中十年：徐兄弟獄中からの手紙・続」解説 ⇒1988『長くきびしい道のり』 pp.239~242

1981年

- 07 【編訳】『徐兄弟 獄中からの手紙：徐勝, 徐俊植の10年』, 岩波書店〈岩波新書 黄版163〉, 214p
- 【解説】「『手紙』を読む人びとへ」, 同上所収, pp.1~28
- 【解説】「[I 努力を, 覚悟を：獄中生活のはじまり(1972~73年)] 章扉解題」, 同上所収, pp.30~31
- 【II 失うことと得ること：学ぶ日々(1974~77年)] 章扉解題」, 同上所収, pp.60~61
- 【III ふたたび謙虚な心で：追憶と願いと(1978~79年)] 章扉解題」, 同上所収, pp.106~107
- 【IV 朝を見ることなく：母の死, その後(1980~81年)] 章扉解題」, 同上所収, pp.162~163
- 【短文】「あとがき」, 同上所収, pp.209~214
- 09 【評論】「『傷ついた龍』の語るもの：一在日韓国人の読み方」, 『未来』180号, 未来社, pp.2~8 ⇒1988『長くきびしい道のり』 pp.208~219

1982年

- 00 【随想】「カーテンコール：『朝を見ることなく』福岡初日の舞台を観て」, 『民藝の仲間』, 「民藝の仲間」編集部編／劇団民藝, ◆未見・号数等不明 ⇒1988『長くきびしい道のり』 pp.188~191

1984 年

- 04 【講演】「徐京植さんの話」, 『徐君兄弟を救うために』 31 号, 徐君兄弟を救う会, pp. 10～19 * 徐君兄弟を守る学友の会主催「徐君兄弟の現状を考える集い」(1984. 02. 26, 京都労働者総合会館), 同会会報『徐君兄弟』第 9 集より転載 ⇒ 1992. 10 徐君兄弟を救う会編『徐君兄弟を救うために』会報合本・第 2 分冊, 影書房, pp. 986～995
- 09 【解説】「長く厳しい道のり: 徐兄弟消息」, 『世界』 466 号, 岩波書店, pp. 321～327 * 同号掲載, 徐勝「煉獄より I」・徐俊植「煉獄より II」解説 ⇒ 1988『長くきびしい道のり』 pp. 243～271
- 09 【随想】「五月の暦」, 『影通信』 3 号, 影書房, pp. 1～3 ⇒ 1988『長くきびしい道のり』 pp. 198～202

1985 年

- 06 【評論】「いま, われらは生きているのか」, 『新日本文学』 40 卷 6 号, 特集「日韓民衆の連帯の未来を求めて: 日韓条約 20 年・光州蜂起 5 年にあたって」, 新日本文学会, pp. 50～52 ⇒ 1988『長くきびしい道のり』 pp. 203～207
- 06 【評論】「分断 40 年と獄中の兄たち」, 『福音と世界』 40 卷 7 号, 特集「戦後 40 年・日韓関係を問う」, 新教出版社, pp. 27～32

1986 年

- 09 【評論】「ストラスプールの卵」, 『思想の科学』 7 次 81 号 (通号 418), 特集「寺の中にある夢」, 思想の科学社, pp. 40～45 ⇒ 1991『私の西洋美術巡礼』第 11 章(「死せる恋人たち」と改題)

1987 年

- 12 【講演】「人間であるためのたたかい: 1987 年秋・兄たちの近況」, 徐君兄弟を救う会ほか計 3 団体発行パンフレット『九・一九東京集会の記録から』, pp. 1～11 * 「獄中 16 年の徐兄弟を即時釈放せよ 9・19 集会」の発言記録(早稲田奉仕園セミナーハウス) 徐君兄弟を救う会・徐さん兄弟を守る会・〈徐君兄弟を守る〉文学創造者と読者の会, 3 団体共催 ⇒ 1992. 10 徐君兄弟を救う会編『徐君兄弟を救うために』会報合本・第 2 分冊, 影書房, pp. 1289～1299

1988 年

- 01 【単著】『長くきびしい道のり: 徐兄弟・獄中の生』, 影書房, 367p * 評論・講演集
【短文】「はじめに」, 同上所収, pp. i～vi

【講演】「人間の尊厳ということ：一九八七年の韓国情勢と徐兄弟」（アムネスティ・インターナショナル日本支部主催「徐京植氏全国講演会」，大阪府立労働センター，1987.09.26），同上所収，pp.7～39

【講演】「『自生』のためのたたかい：徐勝・徐俊直の十一年」（仙台，1982.11.07），『『自生』のためのたたかい』在日韓国人政治犯を救援する家族・僑胞の会，1983.10，◆未見，同上所収，pp.43～83

【講演】「真の人間解放のために：徐兄弟獄中十三年をふまえて」（毎日新聞京都支局ホール，1984.05.20），『はじけ，鳳仙花』，鳳仙花の会，◆未見，同上所収，pp.84～104

【講演】「韓国人として生きること：獄中十五年の徐兄弟を通して」（同志社大学，1986.05.14），『月刊チャペル・アワー』号数未詳，同志社大学宗教部，1986.08，◆未見，同上所収，pp.105～130

【講演】「獄中で生きる意味：獄中十五年，徐兄弟消息」（早稲田奉仕園・朝鮮文化講座，1986.05.08），同上所収，pp.131～173

【資料】「徐兄弟事件関連年表」，同上所収，pp.273～282
⇒2001.01 第二版，影書房，294p *副題なし

【短文】「第二版はしがき」，同上所収，pp.vii～x

05 【解説】「孤独と絶望のなかから：獄中十七年，徐俊植の闘い」，『辺境』3次7号，記録社，pp.275～278, 291（追記）*同号掲載，徐俊植「上告理由書（1987年12月17日）」
解題

05 【随想】「『石』という名前」，『影通信』8号，特集「『長くきびしい道のり』」，影書房，pp.2～4

08 【講演】「祖国に兄たちを訪ねて」，『渡韓報告集 釈放された徐俊植さんに会って』，徐君兄弟を救う会ほか5団体共編・発行，pp.18～24 ⇒1992.10 徐君兄弟を救う会編『徐君兄弟を救うために』会報合本・第2分冊，影書房，pp.1380～1386

1989年

03 【単著】『皇民化政策から指紋押捺まで：在日朝鮮人の「昭和史」』，岩波書店〈岩波ブックスレット128〉，70p *書き下ろし

04 【論考】「第四の好機：『昭和』の終わりと朝鮮」，『世界』526号，小特集「天皇制を考える」，岩波書店，pp.131～141 ⇒1997『分断を生きる』pp.141～160 ⇒2017『日本リベラル派の頽落』pp.259～276

1990年

01 【解説】「19年目の獄中書簡」，『世界』536号，岩波書店，pp.276～279 *同号掲載，

徐勝「ハNST前後：徐勝，獄中からの手紙」解説

- 01 【短文】「1989年読書アンケート」, 『みすず』346号, みすず書房, p.45
- 04 【評論】「私の西洋美術巡礼1」, 『みすず』349号, みすず書房, pp.2~17 ⇒1991『私の西洋美術巡礼』第1~3章
- 05 【評論】「私の西洋美術巡礼2」, 『みすず』350号, みすず書房, pp.26~39 ⇒1991『私の西洋美術巡礼』第4~5章
- 06 【評論】「私の西洋美術巡礼3」, 『みすず』351号, みすず書房, pp.15~20 ⇒1991『私の西洋美術巡礼』第6章
- 07 【評論】「私の西洋美術巡礼4」, 『みすず』352号, みすず書房, pp.32~38 ⇒1991『私の西洋美術巡礼』第7章
- 08 【評論】「私の西洋美術巡礼5」, 『みすず』353号, みすず書房, pp.12~18 ⇒1991『私の西洋美術巡礼』第8章
- 09 【評論】「私の西洋美術巡礼6」, 『みすず』354号, みすず書房, pp.56~62 ⇒1991『私の西洋美術巡礼』第9章
- 11 【評論】「私の西洋美術巡礼7」, 『みすず』356号, みすず書房, pp.34~40 ⇒1991『私の西洋美術巡礼』第10章

1991年

- 06 【単著】『私の西洋美術巡礼』, みすず書房, 217p. *雑誌『みすず』1990.04~11連載(全7回)の同名美術評論等を集成・加筆
⇒1992『나의 서양미술 순례 [私の西洋美術巡礼]』, 박이엽 [パク・イヨブ] 訳, 창작과비평사 [創作と批評社], 192p.
- 07 【随想】「勇氣凜々の人」, 「古在由重 人・行動・思想」編集委員会編『古在由重 人・行動・思想』, 同時代社, pp.81~90 ⇒1997『分断を生きる』pp.263~273(副題「古在由重先生を送る」)
- 08 【共訳】白楽晴『知恵の時代のために：現代韓国から』, オリジン出版センター, 382p
*共訳者：李順愛 *翻訳分担部分：「民衆・民族文学の新段階」pp.32~85, 「生きている申東曄」pp.190~217, 「民族文学論とリアリズム論」pp.289~367
【解説】「解説」, 同上所収, pp.368~382 ⇒1997『分断を生きる』pp.248~262(初出に加筆・改題「白楽晴と「知恵の時代」」)
- 10 【評論】「来るべき「知恵の時代」のために：白楽晴の立論に沿って」, 『Libellus』0(創刊準備)号, 柏書房, pp.24~31 *文責：柏書房企画室
- 12 【対談】「受苦が黙示するもの」, 『Libellus』1号, 柏書房, pp.2~25 *対談者：藤田省三

1992年

- 01 【短文】「1991年読書アンケート」, 『みすず』370号, みすず書房, pp.14~15
- 02 【論考】「美術における戦争と平和」, 『福音と世界』47巻2号, 特集「希望のしるし：
絵画・音楽とメッセージ」, 新教出版社, pp.43~60
- 02 【随想】「七つの湖の都市」, 『Libellus』2号, 柏書房, 表紙裏
- 04 【対談】「現代韓国の文学・思想状況」, 『世界』566号, 岩波書店, pp.156~161 ※対
談者：任軒永
- 08 【随想】「思春期の入り口にて：『寺田寅彦随筆集』〈ヴィタ・リブラリアその1〉」,
『Libellus』5号, 柏書房, pp.32~35 ⇒1995『子どもの涙』（主題改題「思春期の戸口
にて」）pp.13~26
- 10 【随想】「豆を煮るに……：吉川英治『三国志』〈ヴィタ・リブラリアその2〉」,
『Libellus』6号, 柏書房, pp.44~47 ⇒1995『子どもの涙』pp.67~81
- 11 【随想】「高くそびえる人：草津での尹伊桑先生」, 尹伊桑（伊藤成彦編）『わが祖国, わ
が音楽』, 影書房, pp.188~193 ⇒1997『分断を生きる』pp.195~201
- 12 【随想】「厭な奴……：太宰治『思ひ出』〈ヴィタ・リブラリアその3〉」, 『Libellus』7号,
柏書房, pp.54~57 ⇒1995『子どもの涙』（主題改題「いやな奴」）pp.82~95

1993年

- 01 【短文】「1992年読書アンケート」, 『みすず』382号, みすず書房, p.23
- 02 【随想】「男について：思い出の詩人たち〈ヴィタ・リブラリアその4〉」, 『Libellus』8
号, 柏書房, pp.42~45 ⇒1995『子どもの涙』（副題改題「『現代詩人全集』ほか」）
pp.96~112
- 06 【随想】「子どもの涙（前編）：幼い頃読んだ本〈ヴィタ・リブラリアその5〉」,
『Libellus』9号, 柏書房, pp.44~47 ⇒1995『子どもの涙』（加筆の上, 分割・改題
「子どもの涙（1）：エリザベス・ルウィズ『揚子江の少年』・「子どもの涙（2）：ニコラ
イ・バイコフ『偉大なる王』」）pp.27~49
- 08 【随想】「子どもの涙（後編）：ケストナー『飛ぶ教室』〈ヴィタ・リブラリアその6〉」,
『Libellus』10号, 柏書房, p.44~47 ⇒1995『子どもの涙』（改題「子どもの涙（3）：
エーリッヒ・ケストナー『飛ぶ教室』」）pp.56~66
- 10 【随想】「希望とは……：『魯迅案内』のことなど〈ヴィタ・リブラリアその7〉」,
『Libellus』11号, 柏書房, pp.44~47 ⇒1995『子どもの涙』（副題改題「魯迅『故
郷』」）pp.130~144
- 11 【随想】「廃滅せんとする言葉（前編）：許南麒『朝鮮冬物語』〈ヴィタ・リブラリアその
8〉」, 『Libellus』12号, 柏書房, pp.44~47 ⇒1995『子どもの涙』pp.145~156

- 12 【随想】「1枚の絵葉書① アルノルト・ベックリン「ペスト」, 『影書房通信』1号, 影書房, 表紙裏

【対談】「インタビュー わたしと朝鮮：岡部伊都子さんに聞く」, 同上所収, pp.1~8
※対談者：岡部伊都子 ⇒1999『新しい普遍性へ』 pp.7~21

【短文】「編集後記」, 同上所収, p.20 ※署名：K *徐が同誌の実質的な編集責任者

1994年

- 01 【短文】「1993年読書アンケート」, 『みすず』394号, みすず書房, pp.24~25
02 【随想】「廃滅せんとする言葉（後編）：金素雲訳『朝鮮詩集』〈ヴィタ・リブラリアその9〉」, 『Libellus』13号, 柏書房, pp.36~39 ⇒1995『子どもの涙』 pp.157~169
03 【随想】「1枚の絵葉書② ルイ・ジャンモ「悪夢」, 『影書房通信』2号, 影書房, 表紙裏

【対談】「インタビュー ヒロシマからアジアへ：石川逸子さんに聞く」, 同上所収, pp.1~8 ※対談者：石川逸子 ⇒1999『新しい普遍性へ』 pp.23~37

- 04 【随想】「読めなかった本：トーマス・マン『魔の山』〈ヴィタ・リブラリアその10〉」, 『Libellus』14号, 柏書房, pp.30~33 ⇒1995『子どもの涙』 pp.113~129
05 【随想】「なぜ京都に……」, 『アサヒグラフ別冊 京都：みやこのうつろい』, 朝日新聞社, pp.75~76 ⇒1997『分断を生きる』（改題「なぜ京都に？」） pp.161~163
06 【随想】「1枚の絵葉書③ ヘンドリック・テル＝ブルッヘン「猿とバッキンティ」」, 『影書房通信』3号, 影書房, 表紙裏

【対談】「インタビュー 流れ者への憧れ：森まゆみさんに聞く」, 『影書房通信』3号, 影書房, pp.1~8 ※対談者：森まゆみ ⇒1999『新しい普遍性へ』 pp.39~53

- 08 【随想】「橋をわがものにする思想：フランツ・ファノン『地に呪われたる者』〈ヴィタ・リブラリアその11〉」, 『Libellus』16号, 柏書房, pp.38~41 ⇒1995『子どもの涙』 pp.170~183
09 【随想】「1枚の絵葉書④ ロヴィス・コリント「サロメ」」, 『影書房通信』4号, 影書房, 表紙裏

【対談】「特別インタビュー 戦後文化世代の最終走者として：藤田省三さんに聞く（1）」, 同上所収, pp.1~10 ※対談者：藤田省三 ⇒1999『新しい普遍性へ』 pp.55~72
⇒2006.10『藤田省三対話集成2』, みすず書房, pp.349~363（本堂明による注付加）

【短文】「編集後記」, 『影書房通信』4号, 影書房, p.21 ※署名：K

- 11 【単著】『「民族」を読む：20世紀のアポリア』, 日本エディタースクール出版部, 167p
*日本エディタースクールの公開連続講座「読書学校・二十世紀のアポリアを読む：民族と国家」（市村弘正と共同講師, 1993.07~12, 全5回）に基づく

- 12 【随想】「さまよえる老婆」, 『思想の科学』8次23号(通号519), 特集「放浪の事典」, 思想の科学社, pp.4~8 ⇒1997『分断を生きる』pp.13~20
- 12 【随想】「1枚の絵葉書⑤ エゴン・シーレ「四本の樹」」, 『影書房通信』5号, 影書房, 表紙裏
- 【対談】「特別インタビュー 三つの全体主義の時代: 藤田省三さんに聞く(2)」, 同上所収, pp.1~9 ※対談者: 藤田省三 ⇒1997.10『藤田省三著作集6 全体主義の時代経験』, みすず書房, pp.191~209 ⇒1999『新しい普遍性へ』pp.73~90
- 【短文】「編集後記」, 同上所収, p.20 ※署名: K
- 12 【対談】「本と眼差し〈ヴィタ・リブラリア最終回〉」, 『Libellus』18号, 柏書房, p.18~31 ※対談者: 森まゆみ

1995年

- 01 【評論】「アンネ・フランク: 救いのない死を死んだ無辜の少女」, 朝日新聞社編『二十世紀の千人1 世紀の巨人・虚人』, 朝日新聞社, pp.382~385 ⇒2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「もっとも救いのない死」) pp.60~64
- 01 【短文】「1994年読書アンケート」, 『みすず』406号, みすず書房, p.29
- 02 【評論】「ヴァシリー・カンディンスキー: 「抽象画の創始者」になった法学士」, 朝日新聞社編『二十世紀の千人6 メディア社会の旗手たち』, 朝日新聞社, pp.34~37 ⇒2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「《対象》が僕を邪魔する」) pp.45~49
- 【評論】「アグネス・スメドレー: 「フリーランスの革命家」を貫く」, 同上所収, pp.138~141 ⇒2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「世界を駆けた「フリーランスの革命家」) pp.156~160
- 【評論】「佐伯祐三: 悲劇的な客死伝説の内側」, 同上所収, pp.170~173 ⇒2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「「日本」との対決に消耗して客死」) pp.105~109
- 【評論】「鬘光: 国家に強いられた死を見透かす」, 同上所収, pp.258~261 ⇒2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「国家の強いる死を見通した眼」) pp.110~114
- 【評論】「尹伊桑: 20世紀的な挿話に満ちた人生」, 同上所収, pp.298~301 ⇒2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「解放を希求する「傷ついた龍」) pp.226~231
- 【評論】「鴨居玲: 唯一のモチーフは自分自身の真実」, 同上所収, pp.330~333 ⇒2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「最後の自画像画家」) pp.115~119
- 03 【単著】『子どもの涙: ある在日朝鮮人の読書遍歴』, 柏書房, 190p *雑誌『Libellus』(柏書房)連載「ヴィタ・リブラリア」全11回に大幅加筆 *本書で第43回日本エッセイスト・クラブ賞受賞(1995.06)
- 【随想】「ムリーリョの少年: まえがきにかえて」, 同上所収, pp.3~6

- 【短文】「あとがき」, 同上所収, pp.185~190
⇒1998.01 文庫版: 小学館〈小学館文庫〉, 203p
- 【短文】「文庫版によせて」 同上所収, pp.190~195 * 同書解説: 石川逸子「日常から普遍の世界へ」 pp.196~203
⇒2004.09 『소년의 눈물: 서경식의 독서 편력과 영혼의 성장기 [子どもの涙: 徐京植の読書遍歴と魂の成長期]』, 이목 [イ・モク] 訳, 돌베개 [トルベゲ], 256p.
⇒2019.04 復刻版: 高文研, 224p
- 【短文】「復刻版に寄せて」, 同上所収, pp.218~223
- 03 【随想】「1枚の絵葉書⑥ ヨハネス・グリユツケ「野外の祝儀」」, 『影書房通信』6号, 影書房, 表紙裏
- 【対談】「インタビュー 非目的的生き方の政治的価値: ノーマ・フィールドさんに聞く(1)」, 同上所収, pp.1~10 ※対談者: ノーマ・フィールド ⇒1999『新しい普遍性へ』 pp.91~108
- 【短文】「編集後記」, 同上所収, p.20 ※署名: K
- 04 【評論】「金九: 出発点になった「常奴[サンノム]たるの恨み」」, 朝日新聞社編『二十世紀の千人2 戦争と革命の中の闘争者』, 朝日新聞社, pp.70~73 ⇒2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「波瀾万丈の歴史パノラマ」) pp.176~180
- 【評論】「パブロ・カザルス: チェロと指揮棒が生む闘争の調べ」, 同上所収, pp.74~77 ⇒2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「チェロと指揮棒を武器として」) pp.25~29
- 【評論】「安重根: 「東洋の義士」と敵も舌を巻く暗殺者」, 同上所収, pp.78~81 ⇒2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「伊藤博文を射殺した「東洋の義士」) pp.171~175
- 【評論】「リヒャルト・ゾルゲ: 「全人」的能力を地下活動に注ぐ」, 同上所収, pp.166~169 ⇒2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「地下にもぐった「全人」) pp.146~150
- 【評論】「尾崎秀実: 大日本帝国と闘った「単独の革命者」」, 同上所収, pp.218~221 ⇒2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「孤独な単独の革命者」) pp.151~155
- 【評論】「パブロ・ネルーダ: 「反独裁」を貫く奔放な生の肯定」, 同上所収, pp.234~237 ⇒2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「反独裁を貫いた生の肯定者」) pp.15~19
- 【評論】「楊靖宇: 「昼は満州国, 夜は楊の国」と慕われて」, 同上所収, pp.238~241 ⇒2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「「昼は満州国, 夜は楊の国」) pp.191~195
- 【評論】「キム・サン(金山): 中国革命の渦中に消えた「水中の塩」」, 同上所収, pp.242~245 ⇒2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「「水中の塩」となった朝鮮人革命家」) pp.186~190
- 【評論】「サルバドル・アジェンデ: 社会主義を救う戦いに死す」, 同上所収, pp.274~

- 277 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』（副題改題「「チリの道」の途上で戦死」） pp. 65～69
【評論】「シヨル兄妹：信仰と貧弱な複写機でナチに向かう」, 同上所収, pp. 334～337
⇒ 2001『過ぎ去らない人々』（副題改題「白バラは散らず」） pp. 55～59
【評論】「呉己順：韓国の独裁と対峙した「在日」のおモニ」, 同上所収, pp. 346～349
⇒ 2001『過ぎ去らない人々』（副題改題「独裁と対峙したおモニ」） pp. 242～246
【評論】「エルネスト・チェ・ゲバラ：放浪の旅に刻まれた一革命家の軌跡」, 同上所収, pp. 374～377 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』（副題改題「「新しい人間」を目指す」） pp. 75～79
【評論】「ビクトル・ハラ：両手を砕かれても歌い続ける意志」, 同上所収, pp. 394～397 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』（副題改題「両手を砕かれても」） pp. 70～74
【評論】「朴ノへ：「奪われた顔」を担う「顔のない詩人」」, 同上所収, pp. 410～413
⇒ 2001『過ぎ去らない人々』（副題改題「「労働の夜明け」をうたった「顔のない詩人」」） pp. 221～225
- 05 【評論】「河上肇：非利己主義の理想に生きた「求道の人」」, 朝日新聞社編『二十世紀の千人4 多様化する〈知〉の探究者』, 朝日新聞社, pp. 98～101 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』（副題改題「理想に生きた「求道の人」」） pp. 161～165
【評論】「李克魯：母語を守るための努力の先頭に立つ」, 同上所収, pp. 194～197
⇒ 2001『過ぎ去らない人々』（副題改題「民族語なくして民族なし」） pp. 196～200
【評論】「フランツ・ファノン：植民地主義に抗する暴力の理論化」, 同上所収, pp. 386～389 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』（副題改題「「全的人間」の希望」） pp. 85～89
- 06 【評論】「金子文子：日本人を憎みに憎んだ日本人」, 朝日新聞社編『二十世紀の千人8 教祖・意識変革者の群れ [宗教・性・女性解放]』, 朝日新聞社, pp. 262～265 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』（副題改題「国家からの独立闘争」） pp. 136～140
【評論】「長谷川テル：売国奴と呼ばれることを恐れず」, 同上所収, pp. 298～301
⇒ 2001『過ぎ去らない人々』（副題改題「「嬌声売国奴」と呼ばれて」） pp. 141～145
【評論】「ハーヴェイ・ミルク：「カムアウト」こそ権利獲得の道だ」, 同上所収, pp. 342～345 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』（副題改題「カムアウトした「代表的アメリカ人」」） pp. 100～104
- 06 【随想】「1枚の絵葉書⑦ ジャン・フーケ「聖母子」」, 『影書房通信』7号, 影書房, 表紙裏
【対談】「ポスト資本主義社会の連帯を求めて：ノーマ・フィールドさんに聞く (2)」, 同上所収, pp. 1～13 ※対談者：ノーマ・フィールド ⇒ 1999『新しい普遍性へ』 pp. 108～128
- 07 【評論】「対話不能の戦後五十年決議」, 『柏書房 Book Review』, 柏書房 ◆未見・号数

- 未詳 ⇒ 1997『分断を生きる』 pp.164～166
- 09 【評論】「エルンスト・トラー：バイエルン革命のまばゆい光芒を担う」, 朝日新聞社編『二十世紀の千人7 言葉の力に挑む人々 [文学・言語表現]』, 朝日新聞社, pp.146～149
⇒ 2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「バイエルン革命の光芒」) pp.35～39
【評論】「フェデリコ・ガルシア・ロルカ：詩人が銃殺される時代を告げる詩」, 同上所収, pp.194～197 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「詩人が殺される時代」の到来) pp.10～14
【評論】「エーリヒ・ケストナー：ナチスの処刑を切り抜けた機知と度胸」, 同上所収, pp.198～201 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「焚書を見つめた「飛ぶ教室」の作者」) pp.50～54
【評論】「ポール・ニザン：繰り返し巻き返す「参加 [アンガージュマン]」の象徴」, 同上所収, pp.254～257 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「巻き返す「参加 (アンガージュマン)」」) pp.80～84
【評論】「原民喜：体ごとひとつの祈りと化した自死」, 同上所収, pp.258～261 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「体ごと祈りと化し」) pp.131～135
【評論】「尹東柱：自国の言葉と文化を愛した独立を希った罪」, 同上所収, pp.330～333 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「死ぬ日まで空を仰ぎ続けた民族詩人」) pp.211～215
【評論】「プリーモ・レーヴィ：考えることが死につながる文学」, 同上所収, pp.334～337 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「未来のための証人」) pp.90～94
【評論】「ガッサーン・カナファーニー：パレスチナ人をくっきり形象化する」, 同上所収, pp.386～389 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「パレスチナ人の肖像」) pp.95～99
【評論】「金芝河：闘争への栄光から逸脱までを担う「人格」」, 同上所収, pp.390～393 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「民主化闘争を象徴した「集合的人格」の分裂」) pp.216～220
- 09 【随想】「1枚の絵葉書⑧ エミール・ノルデ「海と赤い雲」」, 『影書房通信』8号, 影書房, 表紙裏
【対談】「インタビュー いま「民衆」はどこにいるのか：朴聖焮さんに聞く」, 同上所収, pp.1～9 ※対談者：朴聖焮 ⇒ 1999『新しい普遍性へ』 pp.129～145
【短文】「編集後記」, 同上所収, p.21 ※署名：K
- 10 【論考】「金芝河氏への手紙：自己分裂の痛み」, 『現代思想』23巻10号, 青土社, pp.30～44 * 「1995.02.16記」 ⇒ 1997『分断を生きる』 pp.226～247
- 11 【評論】「洪範図：抗日闘士から劇場守衛に終わる劇的生涯」, 朝日新聞社編『二十世紀

の千人10 マージナル・ピープル [鬼才・異才・奇才]』, 朝日新聞社, pp. 66~69
 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「中央アジアに没した抗日義兵将」) pp. 181~185

【評論】「サッコ&ヴァンゼッティ:反共と排外の嵐の中でつくられた冤罪」, 同上所収,
 pp. 142~145 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「二十世紀を象徴する冤罪事件」)
 pp. 30~34

【評論】「シャイム・スーティン:根無し草の叫びを激烈な色で塗り込める」, 同上所収,
 pp. 190~193 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「正真正銘の根なし草」) pp. 40~
 44

【評論】「ジャック白井:国境や人種を超える夢に身を託す」, 同上所収, pp. 222~225
 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「スペインで戦死した「非国民」」) pp. 20~24

【評論】「小熊秀雄:民衆的な地声で「しゃべり捲くる」力」, 同上所収, pp. 230~233
 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「しゃべり捲くれ!」) pp. 126~130

【評論】「植村浩:孤独なまでに屹立した革命的想像力」, 同上所収, pp. 278~281
 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「屹立する革命的想像力」) pp. 120~125

【評論】「金史良:植民地支配下で「光」を求める屈伸運動」, 同上所収, pp. 286~289
 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「「光」を求める屈伸運動」) pp. 206~210

【評論】「趙文相:日本の戦争で戦犯にされた朝鮮人の胸中」, 同上所収, pp. 298~301
 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「死の意味までも奪われた朝鮮人戦犯」) pp. 201
 ~205

【評論】「江分利満:昭和の日本を生きた「恥」を知る小市民」, 同上所収, pp. 322~
 325 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「恥を知る小市民」) pp. 166~170

【評論】「李珍宇:「朝鮮人部落」から現れた「怪物」を見る目」, 同上所収, pp. 362~
 365 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「「朝鮮人部落」から現れた「怪物」」)
 pp. 232~236

【評論】「梁政明:被害者の痛みと加害者の罪を負って自死」, 同上所収, pp. 374~377
 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』(副題改題「被害者の痛みと加害者の罪を負って」) pp. 237
 ~241

【評論】「〈プライム・エッセー〉「難民の世紀」の墓碑銘」, 同上所収, pp. 414~417
 ⇒ 2001『過ぎ去らない人々』 pp. 248~252

12 【随想】「1枚の絵葉書^⑨ オットー・ディックス「戦争」」, 『影書房通信』9号, 影書房,
 表紙裏

【対談】「インタビュー ベルリンで考える戦後50年:梶村太一郎さんに聞く」, 同上所
 収, pp. 1~9 ※対談者:梶村太一郎 ⇒ 1999『新しい普遍性へ』 pp. 147~162

【随想】「傷ついた龍の死:追悼・尹伊桑先生」, 同上所収, pp. 19~21

- 12 【対談】「魯迅を読む」, 『週刊金曜日』104号(12.22), pp.63~67 ※対談者:佐高信

1996年

- 01 【論考】「〈思想の言葉〉文化ということ」, 『思想』859号, 特集「カルチュラル・スタディーズ:新しい文化批判のために」, pp.2~5 ⇒1997『分断を生きる』pp.7~12
- 01 【対談】「普遍主義というひき白にひかれて:パレスチナと在日をつなぐもの」, 『世界』, 岩波書店, 617号, pp.36~55 ※対談者:ミシェル・クリフィ ⇒1999『新しい普遍性へ』pp.305~337
- 01 【短文】「1995年読書アンケート」, 『みすず』418号, みすず書房, p.3
- 03 【随想】「1枚の絵葉書⑩ ヒエロニスム・ボッシュ「十字架を担うキリスト」」, 『影書房通信』10号, 影書房, 表紙裏
- 【対談】「インタビュー〈藤田省三論集「戦後精神の経験Ⅰ・Ⅱ」及び『[新編]天皇制国家の支配原理』を編集して〉:飯田泰三・宮村治雄さんに聞く」, 同上所収, pp.1~10
※対談者:飯田泰三, 宮村治雄
- 04 【論考】「焰に包まれた天使:作曲家・尹伊桑の死」, 『世界』621号, 岩波書店, pp.204~216 ⇒1997『分断を生きる』pp.202~225
- 04 【評論】「世紀末の旅人:プリーモ・レーヴィへの旅1 イタリアの雪」, 『一冊の本』創刊号, 朝日新聞社, pp.60~61 ⇒以下, 本連載(全19回)は加筆の上, 1999『プリーモ・レーヴィへの旅』
- 05 【論考】「재외 한국인의 고민과 선택: '재일조선인'의 위기와 기로에 놓인 민족관〔在外韓国人の苦難と選択:「在日朝鮮人」の危機と岐路に立たされた民族観〕」, 『역사비평〔歴史批評〕』33号(1996年夏号), 역사비평사〔歴史批評社〕, pp.63~86 ⇒1997『分断を生きる』pp.79~120(改題「新しい民族観を求めて:ある在日朝鮮人の「夢」」)
- 05 【評論】「世紀末の旅人:プリーモ・レーヴィへの旅2 I am very alone」, 『一冊の本』2号, 朝日新聞社, pp.38~39
- 05 【評論】「私のヒーロー」, 『週刊金曜日』123号(05.24), p.59 ⇒1997『分断を生きる』pp.168~169
- 06 【評論】「世紀末の旅人:プリーモ・レーヴィへの旅3 身勝手な死…?」, 『一冊の本』3号, 朝日新聞社, pp.38~39
- 06 【随想】「1枚の絵葉書⑪ マリノ・マリーニ「小騎馬像」」, 『影書房通信』11号, 影書房, 表紙裏
- 【対談】「国民をめぐる(1)」, 同上所収, pp.1~10 ※対談者:日高六郎 ⇒1999『新しい普遍性へ』pp.163~180
- 【短文】「編集後記」, 同上所収, p.23 ※署名:K

- 07 【評論】「世紀末の旅人：プリーモ・レーヴィへの旅4 ピエモンテ」, 『一冊の本』4号, 朝日新聞社, pp. 38～39
- 08 【評論】「世紀末の旅人：プリーモ・レーヴィへの旅5 敵意の時代」, 『一冊の本』5号, 朝日新聞社, pp. 62～63
- 08 【対談】「分断と離散を超えて」, 『現代思想』24巻9号, 特集「想像の共同体」, 青土社, pp. 56～89 ※対談者：臼杵陽
- 09 【評論】「世紀末の旅人：プリーモ・レーヴィへの旅6 不純物」, 『一冊の本』6号, 朝日新聞社, pp. 60～61
- 09 【随想】「1枚の絵葉書⑩ カスパール・ダヴィッド・フリードリッヒ「月を眺める男と女」」, 『影書房通信』12号, 影書房, 表紙裏
 【対談】「国民をめぐる(2)」, 同上所収, pp. 1～8 ※対談者：日高六郎 ⇒1999『新しい普遍性へ』pp. 180～193
- 10 【講演】「多文化主義を超えて」, 『インパクション』99号, 特集「暴力としての文化・文化としての暴力：カルチュラル・スタディーズをめぐる」, インパクト出版会, pp. 95～111 *目次では「多文化主義批判：新しい普遍主義をめざして」と題して, 鶴飼哲と連名(pp. 95～121)。実際は各自の講演記録の併載。東京経済大学近代史研究会主催シンポジウム(1996.06.22)前半部分の講演記録
- 10 【評論】「進行する危機：現代日本学生に根をはる新たな排外主義」, 『飛礫』6巻12号, 特集「問われる歴史責任と日韓条約」, つぶて書房, pp. 4～10 ⇒1997『分断を生きる』pp. 170～181
- 10 【評論】「世紀末の旅人：プリーモ・レーヴィへの旅7 ポー街の闇」, 『一冊の本』7号, 朝日新聞社, pp. 60～61
- 11 【講演】「「民族」を読む：在日朝鮮人の立場から」, 『立命館言語文化研究』8巻1号, 特集「比較文化研究」I「シンポジウム 民族問題を考える」, 立命館大学国際言語文化研究所, pp. 3～25 *同研究所比較文化研究会主催シンポジウム(1995.12.09)における報告, 同号には文京洙「〈コメント〉ナショナリズムの現在と在日朝鮮人：徐京植氏の報告によせて」(pp. 47～54)も掲載 ⇒1997『分断を生きる』pp. 121～137(改題「「民族」再考ノート」・部分掲載)
- 11 【講演】「空虚な主体と危険な主体」, 『国民文化』444号, 国民文化会議, pp. 8～11 *国民文化会議主催1996年8・15集会講演 ⇒1997『分断を生きる』pp. 182～192
- 11 【評論】「世紀末の旅人：プリーモ・レーヴィへの旅8 ポー街の闇(つづき)」, 『一冊の本』8号, 朝日新聞社, pp. 60～61
- 11 【対談】「戦争責任を背負えない戦後日本の精神風土」, 『週刊金曜日』145号(11.01), 金曜日, pp. 48～52 ※対談者：田中伸尚, 「「自由主義史観」という名の自画自賛史観

第1弾」

- 12 【講演】「われわれの夢と課題」, 『インパクション』100号, インパクト出版会, pp.157～162〔講演後の質疑応答の記録は pp.165～184〕 *目次では「多文化主義批判(下):新しい普遍主義をめざして」と題して, 鶴飼哲と連名(pp.157～184)。同誌99号掲載分の続篇, シンポジウムの後半部分の記録
- 12 【評論】「世紀末の旅人:プリーモ・レーヴィへの旅9 「むこう側」」, 『一冊の本』9号, 朝日新聞社, pp.60～61
- 12 【随想】「1枚の絵葉書^⑬ アルフレート・フルトリカ「プレッツェンゼーの大量処刑」」, 『影書房通信』13号, 影書房, 表紙裏
- 【対談】「インタビュー 国家責任と民衆責任:山田昭次さんに聞く」, 同上所収, pp.1～10 *対談者:山田昭次 ⇒1999『新しい普遍性へ』pp.195～212

1997年

- 01 【評論】「世紀末の旅人:プリーモ・レーヴィへの旅10 プナ」, 『一冊の本』10号, 朝日新聞社, pp.68～69
- 01 【短文】「1996年読書アンケート」, 『みすず』430号, みすず書房, pp.18～19
- 02 【評論】「もう黙ってはいられない」, 『週刊金曜日』157号(02.07), 金曜日, pp.24～27 *「『自由主義史観研究会』『新しい歴史教科書をつくる会』等の動きを憂慮する在日朝鮮人のアピール」付載(p.27)
- 02 【評論】「世紀末の旅人:プリーモ・レーヴィへの旅11 霧の朝」, 『一冊の本』11号, 朝日新聞社, pp.60～61
- 03 【論考】「もはや黙っているべきではない:なぜ私は「憂慮する朝鮮人・アピール」への賛同を呼びかけるのか」, 『あごら』227号, 特集「なぜ今「自賛史観」か」, あごら新宿編/BOC出版部, pp.4～15 ⇒1997『分断を生きる』pp.274～289(副題「なぜ私は、「憂慮する在日朝鮮人アピール」への賛同を呼びかけるのか」) ⇒2017『日本リベラル派の頹落』pp.277～290
- 03 【評論】「世紀末の旅人:プリーモ・レーヴィへの旅12 174517」, 『一冊の本』12号, 朝日新聞社, pp.60～61
- 03 【随想】「1枚の絵葉書^⑭ カラヴァッジオ「不信のトマス」」, 『影書房通信』14号, 影書房, 表紙裏
- 【対談】「インタビュー 芸術家を殺す社会:若桑みどりさんに聞く」, 同上所収, pp.1～10 *対談者:若桑みどり ⇒1999『新しい普遍性へ』pp.213～231
- 04 【評論】「世紀末の旅人:プリーモ・レーヴィへの旅13 単純明快?」, 『一冊の本』13号, 朝日新聞社, pp.60～61

- 05 【**単著**】『分断を生きる：「在日」を超えて』, 影書房, 297p ***評論・講演集**
 【**講演**】「断絶の世紀：ショアー（ユダヤ人大虐殺）と在日朝鮮人」（神戸市外国語大学での講演, 1996.10.26）, 同上所収, pp.23～75
 【**短文**】「あとがき」, 同上所収, pp.291～295
- 05 【**評論**】「世紀末の旅人：プリーモ・レーヴィへの旅 14 恥」, 『一冊の本』14号, 朝日新聞社, pp.62～63
- 05 【**評論**】「우려하는 제일 조선인의 ‘어필’에 동참을 호소한다 [憂慮する在日朝鮮人の「アピール」に賛同を呼びかける]」, 『월간 말 [月刊マル]』97年5月号, 월간 말 [月刊マル社], pp.144～149.
- 05 【**短文**】「「エスニック・マイノリティ」か「ネーション」か：在日朝鮮人の進む道」, 『歴史学研究』697号, 歴史学研究会, pp.39～40 *歴史学研究会1997年度大会・全体会「近代日本における“マイノリティ”」の報告要旨（予稿）
- 06 【**評論**】「世紀末の旅人：プリーモ・レーヴィへの旅 15 「人間」」, 『一冊の本』15号, 朝日新聞社, pp.70～71
- 06 【**随想**】「1枚の絵葉書^⑮ ジークフリート・ノイエンハウゼン「ジョアン・ボルヘス・デ・ソウサのための記念」」, 『影書房通信』15号, 影書房, 表紙裏
 【**対談**】「インタビュー あらゆる扉を叩く：鶴飼哲さんに聞く」, 同上所収, pp.1～10
 ※対談者：鶴飼哲 ⇒1999『新しい普遍性へ』pp.233～250
- 07 【**評論**】「世紀末の旅人：プリーモ・レーヴィへの旅 16 グロテスクな誤解」, 『一冊の本』16号, 朝日新聞社, pp.70～71
- 08 【**評論**】「世紀末の旅人：プリーモ・レーヴィへの旅 17 不可触賤民」, 『一冊の本』17号, 朝日新聞社, pp.70～71
- 09 【**評論**】「世紀末の旅人：プリーモ・レーヴィへの旅 18 レ・ウンベルト街75番地」, 『一冊の本』18号, 朝日新聞社, pp.64～65
- 09 【**随想**】「1枚の絵葉書^⑯ フェリックス・ヌスパウム「ユダヤ人証明書をもつ自画像」」, 『影書房通信』16号, 影書房, 表紙裏
 【**対談**】「インタビュー 廃墟は死んでいない：宮田毬栄さんに聞く」, 同上所収, pp.1～9
 ※対談者：宮田毬栄 ⇒1999『新しい普遍性へ』pp.251～267
- 10 【**論考**】「「エスニック・マイノリティ」か「ネーション」か：在日朝鮮人の進む道」, 『歴史学研究』703号, 歴史学研究会, pp.20～30 *1997年度歴史学研究会大会・全体会「近代日本における“マイノリティ”：世界史における20世紀2」での報告 ⇒1998.12「제일조선인이 나아갈 길 : ‘에스닉 마이너리티’인가 ‘네이션’인가 [在日朝鮮人が進むべき道：「エスニック・マイノリティ」か「ネーション」か]」, 『창작과비평 [創作と批評]』102号（1998年冬号）, 창작과비평사 [創作と批評社], pp.353～371. ⇒2002『半難民の

徐京植著作目録

- 位置から』 pp.149～184 (うち「追記」 pp.177～184)
- 10 【評論】「世紀末の旅人：プリーモ・レーヴィへの旅 一瞬の閃光」, 『一冊の本』 19号, 朝日新聞社, pp.64～65 *連載最終回
- 10 【講演】「帝国ふたたび?」, 『世界』 640号, 岩波書店, pp.261～263
【講演】「空洞化した主体」, 同上所収, pp.272～273 *国際学術シンポジウム「アジア太平洋のエポック」(立命館大学アジア太平洋研究センター, 1997.06) 第3フォーラム「国際シンポジウム 記憶・記録・責任:新たな関係の創出をめざして」, pp.257～276
※他の発言者:川村湊, 米山リサ, ノーマ・フィールド, 高橋哲哉(コーディネーター)
- 10 【書評】「〈ジャンル別この一冊 文学〉共振する狂気:『パウル・ツェラン=ネリー・ザックス往復書簡』」, 『世界』 640号, 特集「この本を読もう! 書評96-97」, 岩波書店, pp.67～70
- 11 【講演】「歴史の偽造とナショナリズム」, 『情況』 2期8巻9号, 特集「教育「改革」批判・リストラされる知」, pp.118～131 *徐京植・小山俊士・井上澄夫「文理研主催 東大五月祭企画「自由主義史観」を考える:なぜこんなものを許してしまったのか」(pp.118～145)の一部
- 12 【講演】「新しい排外主義:在日朝鮮人の立場から」, 川田文子・徐京植・三上昭彦・山田昭次・伊藤成彦『歴史への反省と教科書問題:従軍慰安婦論議への視点〈朝鮮問題〉学習・研究シリーズ52号』, 「朝鮮問題」懇話会, pp.16～29 *同懇話会主催公開講座シンポジウム(明治大学, 1996.10.14), 質疑応答(pp.51～68)にも発言あり
- 12 【講演】「答える主体の不在が危険な主体を誘う〈主体の問題をめぐる1〉」, 『論座』 32号, 朝日新聞社, pp.184～188 *日本の戦争責任資料センター主催シンポジウム(中央大学駿河台記念館, 1997.09.28)に基づく記事「シンポジウム ナショナリズムと「従軍慰安婦」問題:基調発言から〈史観論争第9弾〉」(同号, pp.176～191)の一部
- 12 【随想】「1枚の絵葉書⑩ ジョージ・W・ペロуз「どっちもこのクラブの会員」」, 『影書房通信』 17号, 影書房, 表紙裏

1998年

- 01 【短文】「1997年読書アンケート」, 『みすず』 442号, みすず書房, pp.40～41
- 02 【随想】「〈きんようぶんか 映画〉極限のユーモア 奇跡のような逆説」, 『週刊金曜日』 206号(02.13), p.42 *映画「ナムムの家Ⅱ」(1997年)評 ⇒2002『半難民の位置から』, pp.316～318
- 03 【随想】「鮮やかな日本人」, 『世界』 646号, 岩波書店, pp.213～216 *「編集者・安江良介がなしたこと」⇒1999『追悼集 安江良介 その人と思想』岩波書店 ⇒2002『半難民の位置から』(副題「安江良介氏を悼む」付加) pp.340～345

- 03 【随想】「〈現代ライブラリー：私の“中毒書”日記〉「ホロコースト」をテーマに追跡中」, 『週刊現代』40巻9号(03.14), p.130
- 03 【随想】「1枚の絵葉書¹⁸ アルバール・マルケ「ボンヌフとサマリテース」」, 『影書房通信』18号, 影書房, 表紙裏
- 【対談】「インタビュー 脱構築されえないもの, 正義：高橋哲哉さんに聞く」, 『影書房通信』18号, 影書房, pp.1~10 ※対談者：高橋哲哉 ⇒1999『新しい普遍性へ』pp.269~286
- 05 【論考】「母を辱めるな」, 小森陽一・高橋哲哉編『ナショナル・ヒストリーを超えて』東京大学出版会, pp.35~52 * 「執筆者紹介」にも「一言」あり(p.325) ⇒1998.12「어머니를 모욕하지 말라! 「母を辱めるな」」, 『당대비평〔当代批評〕』5号, 생각의나무〔考えの木〕, pp.202~218 ⇒2002『半難民の位置から』pp.17~36 ⇒2017『日本リベラル派の頽落』pp.291~311
- 06 【随想】「1枚の絵葉書¹⁹ ケーテ・コルヴィッツ「ドイツの子供たちは飢えている」」, 『影書房通信』19号, 影書房, 表紙裏
- 【対談】「インタビュー 「女性国際戦犯法廷」の実現に向けて：松井やより氏に聞く」, 同上所収, 影書房, pp.1~9 ※対談者：松井やより ⇒1999『新しい普遍性へ』pp.287~304
- 09 【講演】「民族差別と「健全なナショナリズム」の危険」, 日本の戦争責任資料センター編『ナショナリズムと「慰安婦」問題』, 青木書店, pp.40~47, [パネル・ディスカッションでの発言, pp.63~69, 84~86, 90~91] ⇒2002『半難民の位置から』pp.37~55 ((1)が基調報告の再録, (2)がパネル・ディスカッションでの自身の発言の抜粋, 補筆あり)
- 【論考】「「日本人としての責任」をめぐって：半難民の位置から」, 同上所収, pp.143~174 ⇒2002『半難民の位置から』pp.56~89 (うち「追記」pp.88~89) ⇒2017『日本リベラル派の頽落』pp.313~347
- 10 【随想】「1枚の絵葉書²⁰ グリューネヴァルト「イーゼンハイム祭壇画」より「磔刑」」, 『影書房通信』20号, 影書房, 表紙裏
- 【随想】「根こぎにされた者の墓」, 『影書房通信』20号, 影書房, pp.1~5 ⇒2002『半難民の位置から』pp.346~352
- 【短文】「弔文」, 同上所収, p.5
- 11 【共編著】『二〇世紀を生きた朝鮮人：「在日」から考える』, 大和書房, 298p ※共編者：林哲・趙景達
- 【短文】「まえがき」, 同上所収, pp.1~4 ※ただし署名は「編者」とのみ
- 【論考】「分断時代を全身で生きる：音楽家尹伊桑」, 同上所収, pp.263~291
- 11 【座談会】「久保覚さん追悼座談会 新しい〈つながり〉の創造をもとめて…：本と人を

徐京植著作目録

- 結び, 人と人をつなぐ], 『本の花束』176号, 生活クラブ事業連合生活協同組合連合会計画部図書事業課《本の花束》編集部, p.6 ※参加者: 本選びの会・編集部, 里見実・中西新太郎・松本昌次
- 12 【談話】「引き剥がされた者たち: 徐京植さんに聞く」, 『ほるもん文化』8号, 特集「在日朝鮮人「ふるさと」考」, ほるもん文化編集委員会編/新幹社, pp.11~40 ※聞き手: 金栄
- 12 【書評】「21世紀を〈平和〉の世紀にするために, いま必読の書: プリーモ・レーヴィ『アウシュヴィッツは終わらない』〈本の花束版クラシックス12〉」, 『本の花束』177号, p.6

1999年

- 01 【短文】「1998年読書アンケート」, 『みすず』454号, みすず書房, pp.12~13
- 02 【評論】「〈美術1945年〉絵描きオタク」, 『1945年: 日独全体主義の崩壊〈毎日ムックシリーズ20世紀の記憶〉」, 毎日新聞社, pp.15~16 ⇒2001『青春の死神』(改題「賽銭箱: 藤田嗣治「サイパン島同胞臣節を完うす」(1945)」) pp.151~159
- 03 【評論】「〈美術1914年〉幻視者: オスカー・ココシュカ「風の花嫁」(1914年)」, 『第1次世界大戦1914-1919〈毎日ムックシリーズ20世紀の記憶〉」, 毎日新聞社, p.76 ⇒2001『青春の死神』pp.54~57
- 【評論】「〈美術1915年〉青春の死神: エゴン・シーレ「死と乙女」(1915年)」, 同上所収, p.77 ⇒2001『青春の死神』pp.58~62
- 【評論】「〈美術1917年〉世界戦争の悪夢: ジョージ・グロース「埋葬式: オスカー・パニツァに捧げる」(1917年)」, 同上所収, p.78 ⇒2001『青春の死神』pp.63~67
- 【評論】「〈美術1918年〉狂気と悲哀: 関根正二「信仰の悲しみ」(1918年)」, 同上所収, p.79 ⇒2001『青春の死神』pp.68~71
- 【評論】「〈美術1919年〉死の肖像: アメデオ・モディリアニ「自画像」(1919年)」, 同上所収, p.80 ⇒2001『青春の死神』pp.72~75
- 04 【随想】「証人が死んでいく時代: プリーモ・レーヴィの自殺から12年」, 『東京新聞』04.08夕刊, p.7(文化面) ⇒『中日新聞』05.06夕刊, p.11(文化面) ⇒2002『半難民の位置から』pp.319~322
- 04 【書評】「ファシズムと闘った“普通の人びと”の魂の記録: ピエーロ・マルヴェッツィ, ジョヴァンニ・ピレリ編『イタリア抵抗運動の遺書』〈本の花束版クラシックス15〉」, 『本の花束』181号, p.6
- 05 【対談】「断絶の世紀, 証言の時代: 20世紀の経験が問うているもの 第1回 記憶と証言」, 『世界』661号, 岩波書店, pp.185~195 ※対談者: 高橋哲哉 ⇒以下, 本対談は

連載（全6回）後、2000『断絶の世紀 証言の時代』

【評論】「第1回「記憶と証言」はじめに」 pp.186~187

05 【随想】「五月の蠅のように：私の学問、私の人生」、『教授新聞』05.10 *韓国語 ◆
未見 ⇒2002『半難民の位置から』 pp.309~315

06 【評論】「〈美術1930年〉対象と非対象の境界に立つ：カジミール・マレーヴィチ「頭部」(1928-32年)」、『第三帝国の野望1930-1939〈毎日ムック シリーズ20世紀の記憶〉』、毎日新聞社、p.233 ⇒2001『青春の死神』（主題改題「対象と非対象の境界」） pp.91~95

【評論】「〈美術1931年〉抗議運動のアイコン：ベン・シャーン「サッコとヴァンゼッティの受難」(1931-32年)」、『同上所収』 p.234 ⇒2001『青春の死神』 pp.96~100

【評論】「〈美術1932年〉資本主義文明の遺蹟：ディエゴ・リベーラ「デトロイトの産業」南壁(1932-33年)」、『同上所収』 p.235 ⇒2001『青春の死神』 pp.101~104

【評論】「〈美術1933年〉ナチの神経を逆撫でした画家：オットー・ディックス「七つの大罪」(1933年)」、『同上所収』 p.238 ⇒2001『青春の死神』（主題改題「ナチの神話を逆撫でする」） pp.105~108

【評論】「〈美術1936年〉総統のボルノグラフィー：アドルフ・ツィーグラ「四元素」(1936-37年)」、『同上所収』 p.239 ⇒2001『青春の死神』 pp.109~112

【評論】「〈美術1937年〉表現不可能な苦痛の静けさ：パブロ・ピカソ「ゲルニカ」(1937年)」、『同上所収』 p.240 ⇒2001『青春の死神』 pp.123~126

06 【対談】「断絶の世紀、証言の時代：20世紀の経験が問うているもの 第1回 記憶と証言（承前）」、『世界』662号、岩波書店、pp.235~248 ※対談者：高橋哲哉

07 【単著】『新しい普遍性へ：徐京植対話集』、影書房、380p *『影書房通信』1号(1993.12)~19号(1998.06)連載のインタビュー等を集成

【対談】「ネーションの周縁で死をみつめ出会いをもとめる」、『同上所収』 pp.339~374 ※対談者：鵜飼哲

【短文】「あとがき」、『同上所収』 pp.375~378

07 【論考】「変わらない日本：在日朝鮮人から見た「日の丸・君が代」法制化問題」、『藤本卓編『公論よ起これ！「日の丸・君が代」〈『ひと』別冊〉』、太郎次郎社、pp.52~61 ⇒2002『半難民の位置から』 pp.328~339

07 【対談】「断絶の世紀、証言の時代：20世紀の経験が問うているもの 第2回 哀悼と裁き」、『世界』663号、岩波書店、pp.302~318 ※対談者：高橋哲哉

07 【談話】「〈美術との対話〉を心から楽しむために：『私の西洋美術巡礼』の著者 徐京植さんに聞く」、『本の花束』184号、p.4

08 【単著】『プリーモ・レーヴィへの旅』、朝日新聞社、241p *朝日新聞社の出版PR誌

徐京植著作目録

- 『一冊の本』創刊号(1996.04)以降,全19回連載「世紀末の旅人:プリーモ・レーヴィへの旅」を大幅加筆 *第22回マルコ・ポーロ賞受賞(イタリア文化会館主催,2000.05)
- ⇒2007.12 『시대의 증언자 뿌리모 레비를 찾아서 [時代の証言者 プリーモ・レーヴィを求めて]』, 박광현 [パク・カンヒョン] 訳, 창작과비평사 [創作と批評社], 308p.
- 08 【論考】「あなたはどの場所に座っているのか?:花崎皋平氏への抗弁」, 『みすず』461号, みすず書房, pp.29~37 ⇒2002『半難民の位置から』 pp.123~146(収録時「補注」 pp.137~141, 花崎「脱植民地化」と「共生」の課題(下)関係箇所の抜粋・転載 pp.141~146を付加) ⇒2017『日本リベラル派の頹落』 pp.383~406
- 08 【評論】「〈美術1939年〉ボグロムの記憶:シャイム・スーティン「下校」(1939年)」, 『第2次世界大戦・欧州戦線 1939-1945〈毎日ムック シリーズ 20世紀の記憶〉』, 毎日新聞社, p.142 ⇒2001『青春の死神』 pp.127~131
- 【評論】「〈美術1940年〉土と芸術:エミール・ノルデ「描かれざる絵」より「海と赤い雲」(1938-45年)」, 同上所収, p.143 ⇒2001『青春の死神』 pp.132~136
- 【評論】「〈美術1943年〉追いつめられた男:フェリックス・ヌスバウム「ユダヤ人証明書をもつ自画像」(1943年)」, 同上所収, p.144 ⇒2001『青春の死神』 pp.137~141
- 08 【随想】「〈著者から〉普遍性への通路:『プリーモ・レーヴィへの旅』を書きおえて」, 『一冊の本』41号, 朝日新聞社, pp.46~48 ⇒2002『半難民の位置から』 pp.323~327
- 08 【談話】「人間,一瞬の光:プリーモ・レーヴィの〈断絶〉をたどって(インタビュー 徐京植氏に聞く『プリーモ・レーヴィへの旅』『新しい普遍性へ』)」, 『図書新聞』2450号(08.14), 図書新聞社, pp.1~3 ※聞き手:米田綱路
- 08 【書評】「戦争に抗う人間の感性の力:原民喜『原民喜詩集』〈本の花束版クラシックス19〉」, 『本の花束』185号, p.7
- 08 【対談】「断絶の世紀,証言の時代:20世紀の経験が問うているもの 第3回 責任と主体(上)」, 『世界』664号, 岩波書店, pp.236~251 ※対談者:高橋哲哉
- 09 【論考】「'히노마루'·'기미가요'의 법제화, 죽어가는 일본 민주주의 [「日の丸」・「君が代」の法制化,死にゆく日本の民主主義]」, 『당대비평 [当代批評]』8号, 생각의나무 [考への木], pp.367~377.
- 09 【評論】「〈美術1934年〉現実とは明るいこと:野田英夫「都会」(1934年)」, 『大日本帝国の戦争1・満洲国の幻影 1931-1936〈毎日ムック シリーズ 20世紀の記憶〉』, 毎日新聞社, p.139 ⇒2001『青春の死神』 pp.113~117
- 【評論】「〈美術1936年〉死んだらあか! :長谷川利行「中華料理店」(1936年)」, 同上所収, p.140 ⇒2001『青春の死神』 pp.118~122
- 09 【対談】「断絶の世紀,証言の時代:20世紀の経験が問うているもの 第3回 責任と主

- 体(下)], 『世界』665号, 岩波書店, pp.246~259 ※対談者: 高橋哲哉
- 09 【談話】「〈土曜訪問〉「分断」から発言する/作家 徐京植さん/ツルツル全体主義の陥穽」, 『東京新聞』09.11夕刊, p.5(文化面) ※文責: 中村信也
- 10 【評論】「〈美術〉もう何も見えない: 鬘光「眼のある風景」(1938年)「自画像」(1944年)」, 『大日本帝国の戦争2: 太平洋戦争 1937-1945 〈毎日ムック シリーズ 20世紀の記憶〉』, 毎日新聞社, pp.123~124 ⇒2001『青春の死神』pp.142~150
- 10 【対談】「断絶の世紀, 証言の時代: 20世紀の経験が問うているもの 第4回 断絶と連帯」, 『世界』666号, 岩波書店, pp.303~318 ※対談者: 高橋哲哉
 【短文】「はじめに」 pp.303~304
- 11 【評論】「〈美術1900年〉エロスの舌: エドワルド・ムンク「生命のダンス」(1899-1900年)」, 『第2ミレニアムの終わり・人類の黄昏 1900-1913 〈毎日ムック シリーズ 20世紀の記憶〉』, 毎日新聞社, p.152 ⇒2001『青春の死神』pp.14~17
 【評論】「〈美術1901年〉蒼ざめた怪物: パブロ・ピカソ「自画像」(1901年)」, 同上所収, p.153 ⇒2001『青春の死神』pp.18~21
 【評論】「〈美術1902年〉邪悪な猿: グスタフ・クリムト「ベートーヴェン・フリーズ」より「敵対する力」(1902年)」, 同上所収, p.154 ⇒2001『青春の死神』pp.22~25
 【評論】「〈美術1903年〉戦争の世紀の母子: ケーテ・コルヴィッツ「死んだ子供を抱く母」(1903年)」, 同上所収, p.105 ⇒2001『青春の死神』pp.26~29
 【評論】「〈美術1905年〉静かな野獣: アルベール・マルケ「グラン＝ゾーギュスタン河岸, パリ」(1905年)」, 同上所収, p.155 ⇒2001『青春の死神』pp.30~33
 【評論】「〈美術1906年〉日蔭者: ジョルジュ・ルオー「鏡の前の女」(1906年)」, 同上所収, p.156 ⇒2001『青春の死神』pp.34~37
 【評論】「〈美術1907年〉純粋にドイツ的?: ロヴィス・コリント「大殉教」(1907年)」, 同上所収, p.157 ⇒2001『青春の死神』pp.38~41
 【評論】「〈美術1910年〉シュテトルの記憶: マルク・シャガール「誕生」(1910年)」, 同上所収, p.158 ⇒2001『青春の死神』pp.42~45
 【評論】「〈美術1911年〉出会い: ワシリー・カンディンスキー「印象3(コンサート)」(1911年)」, 同上所収, p.159 ⇒2001『青春の死神』pp.46~49
 【評論】「〈美術1913年〉亀裂: エルンスト・ルードヴィッヒ・キルヒナー「ベルリンの街頭風景」(1913年)」, 同上所収, p.160 ⇒2001『青春の死神』pp.50~53
 【座談会】「20世紀とはいかなる時代だったのか」, 同上所収, pp.282~290 ※参加者: 藤田省三・森まゆみ・鈴木了二・西井一夫, 文責: 西井一夫, 構成: 編集部
- 11 【談話】「今, 国家とどう向きあうか」, 『教育』49巻11号(通号645), 特集「足もとから国家を問う」, 教育科学研究会編/国土社, pp.15~32 ※聞き手: 鈴木聡(『教育』編

集長) ⇒ 2002 『半難民の位置から』 pp. 259~286

- 11 【書評】「颯爽と独立する精神：反権力と反差別を貫いた女性の鮮やかな生涯」, 『本の花束』 188号, p.1 *金子ふみ子『何が私をこうさせたか』書評
- 12 【評論】「歴史と詩」, 『評論』 116号, 日本経済評論社, pp. 6~9

2000年

- 01 【共著】『断絶の世紀 証言の時代：戦争の記憶をめぐる対話』, 岩波書店, 224p ※共著=対談者：高橋哲哉 *雑誌『世界』連載(1995.05~10, 全6回)の連続対談を集成 ⇒ 2002.05 『단절의 세기 증언의 시대：전쟁의 기억을 둘러싼 대화 [断絶の世紀 証言の時代：戦争の記憶をめぐる対話]』, 김경운 [キム・キョンユン] 訳, 삼인 [サムイン], 207p.
- 01 【書評】「知的刺激と観る喜び！ 華麗なルネサンス案内：マーガレット・アストン編『図説 ルネサンス百科事典』」, 『本の花束』 190号, p.4
- 01 【短文】「1999年読書アンケート」, 『みすず』 466号, みすず書房, p.56
- 02 【随想】「1枚の絵葉書^㉔ ベン・シャーン「愛にみちた多くの夜の回想」」, 『影書房通信』 21号, 影書房, 表紙裏
- 【発言】「〈対話集会・日本で民主主義が死ぬ日〉全記録」, 同上所収, 影書房, pp.2~32 *徐発言箇所：pp.3~5, 15, 25, 25, 28~30
- 【短文】「編集後記」, 同上所収, p.32 ※署名：K
- 05 【講演】「〈シンポジウム報告〉戦争責任・ジェンダー・植民地主義」, 『女性・戦争・人権』 3号, 特集「戦争責任・ジェンダー・植民地主義」, 「女性・戦争・人権」学会学会誌編集委員会編, pp.6~32 *同学会第3回大会シンポジウム(早稲田大学, 1999.06.06)記録(pp.6~46)の一部(他のパネリスト：池内靖子・中原道子, 司会：源淳子)
- 05 【書評】「時空を超えて読む者を引き込む波瀾万丈の自伝文学／植民地支配の歴史をみつめ, 隣人の心を理解するために：『白凡逸志：金九自叙伝』〈20世紀を読みなおす2〉」, 『本の花束』 194号, p.7
- 06 【共編著】『石原都知事「三国人」発言の何が問題なのか』, 影書房, 286p. ※共編者：内海愛子・高橋哲哉
- 【座談会】「〈緊急座談会〉「三国人」発言の何が問われているのか?」, 同上所収, pp.11~70 ※参加者：内海愛子・高橋哲哉
- 【短文】「〈キーワードコラム〉関東大震災時の朝鮮人虐殺事件」, 「〈同〉「在日朝鮮人」とは何か」, 「〈同〉金嬉老事件」, 同上所収, pp.14, 24~25, 63
- 07 【論考】「「日本人としての責任」再考：考え抜かれた意図的怠慢」, VAWW-NET Japan 編『日本軍性奴隷制を裁く：2000年女性国際戦犯法廷の記録2 加害の精神構造と戦後責

- 任], 緑風出版, pp. 230~263 ⇒ 2002 『半難民の位置から』 pp. 90~122 ⇒ 2017 『日本リベラル派の頹落』 pp. 349~381
- 07 【評論】「〈美術 1920 年〉歴史の天使：パウル・クレー「新しい天使」(1920 年)』, 『ロストゼネレーション 失われた世代 1920-1929 〈毎日ムック シリーズ 20 世紀の記憶〉』, 毎日新聞社, p. 70 ⇒ 2001 『青春の死神』 pp. 76~80
- 【評論】「〈美術 1924 年〉異端の放つ光：池田遥邨「災禍の跡」(1924 年)』, 同上所収, p. 71 ⇒ 2001 『青春の死神』(主題改題「異端の光」) pp. 81~85
- 【評論】「〈美術 1926 年〉たそがれゆく近代日本の風景：佐伯祐三「新橋風景」』, 同上所収, p. 72 ⇒ 2001 『青春の死神』(主題改題「たそがれゆく近代日本」) pp. 86~90
- 07 【対談】「〈男性との対話 16〉西欧・アジア・日本のアート：社会に関わるアート、私に向かうアート』, 『女たちの 21 世紀』 23 号, 特集「アート・女性・アジア：「私」と社会への視線』, pp. 61~66 ※対談者：松井やより ⇒ 2002.04 松井やより編著『20 人の男たちと語る性と政治』, 御茶の水書房, pp. 183~198
- 09 【講演】「徐京植さんの〈美術との対話〉2 星への旅：ゴッホ再発見』, 『本の花束』 198 号, p. 4
- 【書評】「坂崎乙郎編著『ゴッホ』』, 同上所収, p. 4
- 11 【談話】「インタビュー 難民としての在日朝鮮人』, 『季報唯物論研究』 24 号, 特集「ジェンダーとナショナリティー』, 季報「唯物論研究」刊行会編, pp. 32~48 ※聞き手：町口哲生 ⇒ 2002 『半難民の位置から』 pp. 287~306
- 11 【書評】「人間性の勝利の物語：尹伊桑, ルイーゼ・リンザー『傷ついた龍』』, 『本の花束』 200 号, p. 3
- 【書評】「沈黙が語りはじめる：〈20 世紀の写真集〉ディルク・ライナルツ『死の沈黙』』, 同上所収, p. 4
- 【座談会】「『本の花束』創刊 200 号記念座談会』, 同上所収, pp. 2~3.6 ※参加者：中西新太郎・三宅晶子・池田逸子
- 12 【評論】「身を灼く恥』, 『週刊朝日百科 世界の文学 73 ヨーロッパ V レーヴィ, シャラーモフ, ソルジェニーツィンほか：ホロコーストと強制収容所』, 朝日新聞社 (12.10), pp. 92~93 ⇒ 2002 『半難民の位置から』 pp. 7~13
- 12 【対談】「“小さき人々”の声を聞く：暴力と破滅の 20 世紀を見据えて』, 『世界』 682 号, 岩波書店, pp. 182~195 ※対談者：スヴェトラナ・アレクシェーヴィッチ, 通訳・翻訳：三浦みどり・柴田友子

2001 年

- 01 【単著】『過ぎ去らない人々：難民の世紀の墓碑銘』, 影書房, 252p * 『20 世紀の千

徐京植著作目録

- 人』全10巻(朝日新聞社, 1995.1~11)のうち, 1・2・4・6・7・8・10巻に掲載された人物評論を集成
- 【短文】「はしがき」, 同上所収, pp.1~2
- ⇒2007.09 『사라지지 않는 사람들 : 20 세기를 온몸으로 살아간 49 인의 초상 [過ぎ去らない人びと : 20 世紀を全身全霊で生きた 49 人の肖像]』, 이목 [イ・モク] 訳, 돌베개 [トルベゲ], 336p.
- 01 【書評】「心を解き放つ生の芸術 : 『アウトサイダー・アート』」, 『本の花束』202号, p.4
- 01 【短文】「2000年読書アンケート」, 『みすず』478号, みすず書房, pp.61~62
- 05 【随想】「1枚の絵葉書^㉔ フェデリコ・ガルシア・ロルカ [Ilustración del 900]」, 『影書房通信』21号, 影書房, 表紙裏
- 【発言】「対話集会『断絶の世紀 証言の時代』全記録」, 同上所収, pp.2~37 * 徐発言箇所 : pp.2~3, 24~26, 32~33, 35~36
- 06 【論考】「誰がフェリックス・ヌスバウムを憶えているのか? : 発見/再発見される「証言としての芸術」」, 『現代思想』29巻7号, 青土社, pp.26~43 ⇒2010『汝の目を信じよ!』pp.152~184
- 06 【講演】「断絶を見据えて : 在日朝鮮人と日本人」, 『徐京植さんとの対話』, パラムせんださい * パラムせんださい主催対話集会(2000.11.11)の記録 ◆未見 ⇒2003『秤にかけてはならない』pp.143~206(表題冒頭に「仙台の対話1」付加)
- 07 【単著】『青春の死神 : 記憶のなかの20世紀絵画』, 毎日新聞社, 159p * 〈毎日ムックシリーズ20世紀の記憶〉連載の美術コラム31編を集成
- 【短文】「地下室の窓 : 序にかえて」, pp.5~11
- ⇒2002.07 『청춘의 사진 : 20 세기의 악몽과 온몸으로 싸운 화가들 [青春の死神 : 20 世紀の悪夢と全身で戦った絵画たち]』, 김석희 [キム・ソッキ] 訳, 창작과비평사 [創作と批評社], 216p.
- 07 【講演】「在日朝鮮人は「民衆」か? : 韓国民衆神学への問いかけ」, 富坂キリスト教センター編『鼓動する東アジアのキリスト教』, 新教出版社, pp.54~79 ⇒2002『半難民の位置から』pp.185~209(うち「追記」p.209) ⇒2004.10「재일조선인은 ‘민중’인가? : 한국 민중신학을 향한 문제 제기 [在日朝鮮人は「民衆」か : 韓国民衆神学に向けた問題提起]」, 『시대와 민중신학 [時代と民衆神学]』8号, 제3시대 그리스도교연구소 [第3世代キリスト教研究所], pp.209~234.
- 07 【談話】「徐京植さんの〈美術との対話〉3 記憶のなかの20世紀絵画」, 『本の花束』208号, pp.5~6
- 08 【評論】「『希望』について」, 『ユリイカ : 詩と批評』33巻9号(通号450), 特集「〈沖

- 縄)から: ことば, 映像, 記憶, その可能性], pp.144~147
- 09 【講演】「記憶・証言・断絶: 植民地認識の継承に関する私論」, 『現代法学』2号, 東京経済大学現代法学会, pp.35~73 * 第4回日本植民地教育史研究国際シンポジウム「植民地認識はいかに深化したか」報告(東京学芸大学, 2000.12.22) ⇒ 2002『半難民の位置から』pp.210~256(うち「追記」p.256)
- 09 【対談】「ヒロシマ・ナガサキを「人類の悲劇」になしうるか」, 『世界』692号, 特集「ヒロシマ・ナガサキ: 「空洞化」をどう超えるか」, 岩波書店, pp.64~74 ※対談者: 林京子
- 10 【論考】「扉を押し開くもの: 「聖トマスの不信」をめぐる」, 岡田温司編著『カラヴァッジョ鑑』, 人文書院, pp.44~54 ⇒ 2010『汝の目を信じよ!』pp.1~12(副題改題「《トマスの不信》をめぐる」)
- 10 【随想】「〈心の書〉『ゴッホ書簡全集』全6巻」, 『朝日新聞』10.29夕刊, p.8(ひょうまん欄)
- 11 【随想】「〈心の書〉『完訳 水滸伝』全10巻」, 『朝日新聞』11.05夕刊, p.8(ひょうまん欄)
- 11 【随想】「〈心の書〉『荒野に呼ぶ声』」, 『朝日新聞』11.12夕刊, p.6(ひょうまん欄)
- 11 【書評】「芸術の偉大な力と激動の生涯: アンソニー・ヒューズ『岩波 世界の美術 ミケランジェロ』」, 『本の花束』212号, p.4 * 「特集 フィレンツェ讃歌: 〈共和国の自由〉が生んだ美の宝庫」
- 11 【対談】「苦悩の遠近法: いま, ゴッホを語る」, 『現代思想』29巻14号, 青土社, pp.8~36 ※対談者: 矢野静明 ⇒ 2010『汝の目を信じよ!』pp.213~251
- 12 【書評】「いま耳を傾けるべき〈理性の声〉: 「パレスチナ問題」への人間的想像力を育てるために」, 『本の花束』213号, pp.1~2 * エドワード・サイド『ペンと剣』書評 ⇒ 2006.01『パレスチナと私たち』pp.55~57

2002年

- 01 【短文】「2001年読書アンケート」, 『みすず』490号, みすず書房, pp.33~34
- 02 【書評】「友愛と共存のための呼びかけ: イブラーヒム・スース『ユダヤ人の友への手紙』〈本の花束版クラシックス35〉」, 『本の花束』215号, p.6
- 03 【単著】『半難民の位置から: 戦後責任論争と在日朝鮮人』, 影書房, 362p * 評論・講演集
- 【短文】「あとがき」, 同上所収, pp.353~362
- ⇒ 2006.04 『난민과 국민 사이: 제일조선인 서경식의 사유와 성찰 [難民と国民のあいだ: 在日朝鮮人徐京植の思惟と省察]』, 이규수, 임성모 [イ・ギユス, イム・ソンモ] 訳, 들베

徐京植著作目録

刊〔トルペゲ〕, 328p.

- 06 【談話】「歴史主体論争と国家思想」, 『ポリティーク』4号, 旬報社, pp.158~197 ※
聞き手: 中西新太郎 ⇒ 2003『秤にかけてはならない』pp.67~110 (改題「在日朝鮮人
と国民主義」)
- 07 【講演】「朝鮮とパレスチナ:あるいは日本とイスラエル」, 『徐京植さんとの対話:朝鮮
とパレスチナ』, パレスチナ・オリーブ, ◆未見 *パレスチナ・オリーブ主催対話集会
(2002.02.10)の記録 ⇒ 2003『秤にかけてはならない』pp.207~271 (表題冒頭に「仙
台の対話2」付加, 早尾貴紀「対話集会記録を編集して」pp.269~271)
- 07 【論考】「断絶の世紀の言語経験:レーヴィ, アメリー, そしてツェラーン」, 『ツェラー
ン研究』4号, 日本ツェラーン協会, pp.1~27 ⇒ 2010『植民地主義の暴力』pp.111~
152
- 08 【書評】「《殺すな!》ともう一度:失ってはならない記憶・戦場カメラマンの遺作集」,
『本の花束』221号, pp.1~2
- 10 【随想】「内側から燃える光:「ドイツ表現主義の芸術」展を見る」, 『しんぶん赤旗』
10.26 (学問・文化面)
- 10 【書評】「拉致の背景に何が…通説破った篤学が語る:中塚明著『これだけは知っておき
たい日本と韓国・朝鮮の歴史』」, 『東京新聞』10.27朝刊, p.10 (読書面)
- 11 【談話】「「半難民」から見えてくるもの」, 『現代思想』30巻13号, 特集「難民とは誰
か」, 青土社, pp.60~79 ⇒ 2003『秤にかけてはならない』pp.111~140
- 11 【論考】「秤にかけてはならない:朝鮮人と日本人へのメッセージ」, 『現代思想』30巻
14号臨時増刊, 総特集「日朝関係」, 青土社, pp.29~42 ⇒ 2003『秤にかけてはならな
い』pp.7~24 ⇒ 2017『日本リベラル派の頹落』pp.407~432
- 11 【発言】「[基調発言]」, 『〈コンパッション〉は可能か?』対話集会実行委員会編『〈コン
パッション(共感共苦)〉は可能か?:歴史認識と教科書問題を考える』, 影書房, pp.39
~46 *質疑応答での発言部分(pp.68~71, 85~87)
【評論】「イタリア・パルチザンの歌」, 同上所収, pp.157~165
- 12 【短文】「2002年 私の3冊」, 『東京新聞』12.22朝刊, p.9 (読書面)
- 12 【座談会】「〈未来のための証人〉プリーモ・レヴィを読む」, 『本の花束』225号, pp.1
~2 ※参加者:高橋哲哉・「本選びの会」メンバー

2003年

- 02 【短文】「2002年読書アンケート」, 『みすず』502号(1・2月合併), みすず書房,
pp.36~37
- 02 【談話】「特集 在日朝鮮人・生活者の声」, 『本の花束』227号, p.2 *「在日朝鮮人

- 生活史から日朝関係を考える」学習会（2002.12.16）席上での高和政・徐京植・松本昌次
3名の話の要旨（ただし3者の個別の発言箇所の指示なし）
- 03 【論考】「저울에 달아서는 안 된다 : 조선인과 일본인에게 보내는 메시지 [秤にかけてはならない：朝鮮人と日本人に送るメッセージ]」, 『당대비평 [当代批評]』21号, 생각의나무 [考えの木], pp.266~286.
- 03 【談話】「想像力の欠如に抵抗する」, 『京都大学新聞』2314号 (03.01), p.5 *同紙
「二次試験受験生特集号特別企画 徐京植インタビュー」
- 03 【書評】「戦争への時代に聞く賢者の声, 豊穰な語り：イクバル・アフマド著『帝国との対決：イクバル・アフマド発言集』」, 『東京新聞』03.16朝刊, p.10 (読書面)
- 04 【書評】「真の普遍性をめざす精神の放浪：明晰かつ豊穰に語られる感動的な自伝」, 『本の花束』229号, p.1 *エドワード・サイド『遠い場所の記憶：自伝』書評
【書評】「いま想起すべき剛直な精神：『魯迅評論集』『阿Q正伝・狂人日記』」, 同上所収, p.3
【座談会】「市民の読書運動の可能性」, 同上所収, pp.2~3 *参加者：中西新太郎・三宅晶子・池田逸子
- 08 【講演】「日朝の「断絶」は超えられるか：秤にかけてはならない」, 第9条の会・オーバー東京編『徐京植講演録：第9条を地球憲法に〈あーていくる9ブックレット6〉』, ◆未見 *同会主催講演（文京区民センター, 2003.03.15）⇒2003『秤にかけてはならない』pp.25~64（副題は削除）
- 08 【講演】「難民とは何か：作家・徐京植さんの語りから」1~7, 『毎日新聞』京都地方版 08.14~17, 20, 22~23 *立命館大学での講演（2003.08.09）※要約文責：中村一成
- 08 【対談】「河野保雄連載対談56 尹伊桑の音楽を語る・その1」, 『音楽現代』33巻8号（通号388）, 芸術現代社, pp.106~109 ※対談者：河野保雄
- 09 【単著】『秤にかけてはならない：日朝問題を考える座標軸』, 影書房, 273p *評論・講演集
【短文】「はしがき」, 同上所収, pp.3~5
- 09 【対談】「河野保雄連載対談57 尹伊桑の音楽を語る・その2」, 『音楽現代』33巻9号（通号389）, 芸術現代社, pp.142~144 ※対談者：河野保雄
- 10 【随想】「藤田省三先生を送る」, 『みすず』510号, みすず書房, pp.23~27 *偲ぶ会での発言の記録, 追記あり「2003年8月23日 ミュンヘンにて」
- 10 【対談】「河野保雄連載対談58 尹伊桑の音楽を語る・その3」, 『音楽現代』33巻10号（通号390）, 芸術現代社, pp.130~132 ※対談者：河野保雄
- 11 【論考】「真実を語り続けようとする意志」, 『現代思想』31巻14号臨時増刊, 総特集「サイド」, 青土社, pp.78~83

- 11 【対談】「河野保雄連載対談 59 尹伊桑の音楽を語る・その4」, 『音楽現代』33巻11号 (通号391), pp.132~135 ※対談者:河野保雄 ⇒以上1~4の対談を合わせて, 2005.11 河野保雄『現代音楽を探せ:河野保雄対談集』, 芸術現代社, pp.269~301

2004年

- 02 【短文】「2003年読書アンケート」, 『みすず』513号(1・2月合併), みすず書房, pp.80~81
- 04 【評論】「猿の不吉な呼び声」, ダニエル・エルナンデス-サラサール『グアテマラ ある天使の記憶:ダニエル・エルナンデス-サラサール写真集』, 影書房, pp.115~119
- 06 【評論】「ディアスポラ紀行1 わだちのフナ:東京・2004年3月」, 『世界』727号, 岩波書店, pp.280~290 ⇒以下, 本連載(全11回)は加筆の上, 2005『ディアスポラ紀行』
- 07 【評論】「ディアスポラ紀行2 死を想う日①:ロンドン・2001年12月」, 『世界』728号, 岩波書店, pp.313~322
- 07 【評論】「人を引き裂く境界線」, 『DAYS JAPAN』1巻4号(通号4), 特集「38度線:一触即発の半世紀」, デイズ・ジャパン, pp.10~11, 17, 24
- 08 【評論】「ディアスポラ紀行3 死を想う日②:ロンドン・2001年12月」, 『世界』729号, 岩波書店, pp.281~290
- 09 【評論】「ディアスポラ紀行4 死を想う日③:ロンドン・2001年12月」, 『世界』730号, 岩波書店, pp.292~302
- 10 【評論】「ディアスポラ紀行5 追放された者たち①:カッセル・2002年8月」, 『世界』731号, 岩波書店, pp.281~290
- 10 【講演】「周縁化されたものが憲法の価値を知る〈沖縄で憲法を考える〉」, 『前夜』I期1号, 特定非営利活動法人前夜発行/影書房発売, pp.108~127 *沖縄県憲法普及協議会主催「2004年憲法講演会」講演(2004.05.03, 那覇市民会館), 原題「「断絶」を超えるために」
- 【短文】「創刊号記念読書アンケート《文化と抵抗》」, 同上所収, pp.258~259
- 11 【評論】「ディアスポラ紀行6 暴力の記憶①:光州・1990年3月, 2000年5月」, 『世界』733号, 岩波書店, pp.282~290
- 11 【評論】「〈今〉を刻む人びと」在日同胞を暴力的に分断した「国家保安法」, 『統一評論』469号, 統一評論新社, pp.59~61
- 12 【評論】「ディアスポラ紀行7 暴力の記憶②:光州・2000年5月」, 『世界』734号, 岩波書店, pp.283~290
- 00 【短文】「希な望み」, 『前夜』創刊リーフレット「前夜への招待」, ◆未見 ⇒2018『責

任について』 pp. 240~241

2005年

01 【評論】「ディアスポラ紀行 8 暴力の記憶③：光州・2000年5月」『世界』735号，岩波書店，pp. 340~347

01 【講演】「虐殺とアート〈記憶の闘いの現在：講演と応答〉」，『前夜』I期2号，特集「反植民地主義」，pp. 140~151 *ダニエル・エルナンデス-サラサール講演「グアテマラ ある天使の記憶」への応答（2004.05.15，セッションハウス），質疑応答（pp. 151~156）にも徐の発言あり ⇒2010『汝の目を信じよ！』 pp. 185~204

【論考】「戦争の時代と芸術家1 オットー・ディックス1」，同上所収，pp. 230~236
⇒以下，本連載（全5回）は大幅に加筆・再構成の上，2010『汝の目を信じよ！』

02 【共著】『教養の再生のために：危機の時代の想像力』，影書房，169p. ※共著者：加藤周一，ノーマ・フィールド *表紙には「東京経済大学21世紀教養プログラム発足記念講演会」と表記

【短文】「はしがき」，同上所収，pp. 5~7

【講演】「いまなぜ「教養」か」，同上所収，pp. 9~25

【対談】「教養に何ができるか」，同上所収，pp. 67~128 ※対談者：加藤周一

【講演】「現代の教養とは何か」，同上所収，pp. 129~168

⇒2007.08 가토 슈이치・노마 필드・서경식 [加藤周一，ノーマ・フィールド，徐京植] 『교양, 모든 것의 시작: 우리 시대에 인문교양은 왜 필요한가? [教養, すべての始まり: この時代に人文教養はなぜ必要なのか?』, 이목 [イ・モク] 訳, 노마드북스 [ノマドブックス]，216p.

02 【論考】「怪物の影：「小松川事件」と表象の暴力」，岩崎稔・大川正彦・中野敏男・李孝徳編『継続する植民地主義：ジェンダー／民族／人種／階級』，青弓社，pp. 345~376
⇒2010『植民地主義の暴力』 pp. 22~62

02 【評論】「ディアスポラ紀行 9 追放された者たち②：ブリュッセル，オスナブリュック・2002年5月」，『世界』736号，岩波書店，pp. 325~334

03 【評論】「ディアスポラ紀行 10 追放された者たち③：ザルツブルク・2001-2004年」，『世界』737号，岩波書店，pp. 280~290

04 【評論】「ディアスポラ紀行 11（最終回）追放された者たち④：パリ・1998年8月，東京2004年11月」，『世界』738号，岩波書店，pp. 291~302

04 【座談会】「徹底討論 「戦後」とは何だったのか」，『前夜』I期3号，特集「「戦後」再考」，pp. 18~60 ※出席者：中野敏男・高橋哲哉・中西新太郎

【対談】「〈前夜インタビュー 新しい文化と抵抗のために3〉人間が美しかった：韓国民

徐京植著作目録

- 主化闘争と文化運動], 同上所収, pp.208~228 ※対談者: 洪成潭, 訳者: 古川美佳
- 【論考】「戦争の時代と芸術家2 オットー・ディックス2」, 同上所収, p.236~247
- 07 【単著】『ディアスポラ紀行: 追放された者のまなざし』, 岩波書店〈岩波新書 新赤版961〉, 211p *雑誌『世界』連載の同名評論(全11回, 2004.06~2005.04)に加筆
⇒2006.01 『디아스포라 기행: 추방당한 자의 시선 [ディアスポラ紀行: 追放された者の視点]』, 김혜신 [キム・ヘシン] 訳, 돌베개 [トルベゲ], 231p.
- 07 【対談】「〈前夜インタビュー 新しい文化と抵抗のために4〉 ブラッシュ・ストローク: ガストアルバイターからアーティストへ」, 『前夜』I期4号, 特集「〈女たち〉の現在」, pp.129~145 ※対談者: ソン・ヒョンスク
- 【論考】「戦争の時代と芸術家3 オットー・ディックス3」, 同上所収, pp.250~256
- 【短文】「〈お詫びと訂正〉 梁澄子さんのご指摘をうけて」, 同上所収, p.289
- 10 【論考】「毀れた言葉: 原民喜「アルプスの真昼」に寄せて」, 『前夜』I期5号, pp.6~12
- 【座談会】「特集にあたって」, 同上所収, 特集「戦争と芸術」, pp.26~32 ※参加者: コリン・コバヤシ, 菊池恵介, 李孝徳, 高和政
- 【論考】「戦争の時代と芸術家4 オットー・ディックス4」, 同上所収, pp.132~139
- 【対談】「インタビュー プリーモ・レーヴィの思い出」, 同上所収, 特集「戦争と芸術」, pp.147~156 ※対談者: ピアンカ・グイディッティ=セラ, ヴァルテル・バルベリス
- 【対談】「〈前夜インタビュー〉時代をひらく: 韓国女性運動の経験」, 同上所収, pp.166~182 ※対談者: 韓明淑(尹京媛とともに聴き取り)
- 10 【論考】「コメント」, 『歴史学研究』807号, 歴史学研究会, pp.19~23 *歴史学研究会2005年度大会・全体会「イスラームとアメリカ: 民主主義という眩惑」でのコメント
- 10 【評論】「「真実のくに」への困難な願い」, 季刊『前夜』編集委員会編・発行『ルート181: パレスチナ~イスラエル 旅の断章〈季刊『前夜』別冊〉』, 発売: 影書房, pp.21~23

2006年

- 01 【論考】「道徳性をめぐる闘争: ホー・チミンと「革命的単純さ」」, 『前夜』I期6号, 特集「第三世界という経験」, pp.81~89 ⇒2010『植民地主義の暴力』pp.294~312
- 【座談会】「〈監督来日 特別座談会〉傷のうえを歩む旅: 記憶・責任・言語・共生」, 同上所収, pp.158~182 ※参加者: ミシェル・クレイフィ, エイアル・シヴァン, 鶴飼哲, 訳者: 西山雄二
- 01 【講演】「なぜ『ルート181』を上演しようとするのか」, 季刊『前夜』編集委員会編『パレスチナと私たち: 映画『ルート181』東京特別上映 プレ講演会記録集〈前夜ハンド

- ブック)』, 特定非営利活動法人前夜, pp. 2~9
- 【対談】「対話」, 同上所収, pp. 14~19 ※対談者: 清末愛砂 * 以上は同ブレ講演会 第1回「パレスチナと私たち」(2005.09.03)の記録
- 04 【論考】「戦争の時代と芸術家5 オットー・ディックス5」, 『前夜』I期7号, pp. 234~245
- 【短文】「〈編集委員から〉茨木のり子さんのこと／ご挨拶: しばらく日本を離れるにあたって」, 同上所収, p. 286~287
- 06 【対談】「박권일-서경식 도쿄케이자이대 교수: 디아스포라로 살아가는 건 나의 숙명 [パク・クォンイル-徐京植 東京経済大学教授: ディアスポラとして生きることは私の宿命]」 『월간 말 [月刊マル]』, 월간 말 [月刊マル社], pp. 48~53. ※対談者: 박권일 [パク・クォンイル]
- 10 【論考】「母語という暴力: 尹東柱を手がかりに考える」, 『前夜』I期9号, 特集「移動と記憶」, pp. 92~99 ⇒ 2010『植民地主義の暴力』, pp. 153~167
- 【対談】「〈前夜インタビュー〉白バラ抵抗運動の記憶」, 同上所収, pp. 195~204 ※対談者: フランツ・ミュラー (菊池恵介と聴き取り), 訳者: 須藤温子
- 00 【論考】「『태양 속의 남자들』이 던지는 물음: ‘우리들’은 누구인가? [『太陽の男たち』が問いかける, 「私たち」とは誰か?」], 『불 Journal BOL』vol. 2 (2006 spring), 한국문화예술위원회 인사미술공간 [韓国文化芸術委員会 仁寺美術空間], ◆発行月・頁未詳 ⇒ 2010『植民地主義の暴力』 pp. 243~258

2007年

- 04 【評論】「ソウル-ベルリン玉突き書簡 第1信 家」, 『世界』763号, 岩波書店, pp. 228~237 ※共著者: 多和田葉子 ⇒ 2007『ソウル-ベルリン玉突き書簡』 pp. 1~18
- 05 【評論】「ソウル-ベルリン玉突き書簡 第2信 名前」, 『世界』765号, 岩波書店, pp. 226~235 ※共著者: 多和田葉子 ⇒ 2007『ソウル-ベルリン玉突き書簡』 pp. 19~37
- 06 【論考】「ソウルで『由熙』を読む: 李良枝とのニアミス」, 『社会文学』26号, 特集「『在日』文学: 過去・現在・未来」, 日本社会文学会, pp. 111~124 ⇒ 2010『植民地主義の暴力』 pp. 168~194
- 06 【論考】「ある在日朝鮮人の肖像」, 『분단의 경계를 허무는 두 자이니치의 망향가: 재일한인 100년의 사진기록 [分断の境界を崩す2人の在日の望郷歌: 在日韓人100年の写真記録]』, 현실문화연구 [現実文化研究], ◆頁未詳 ⇒ 2010『植民地主義の暴力』 pp. 11~21
- 06 【評論】「ソウル-ベルリン玉突き書簡 第3信 旅」, 『世界』766号, 岩波書店, pp. 196~204 ※共著者: 多和田葉子 ⇒ 2007『ソウル-ベルリン玉突き書簡』 pp. 39~

56

07 【評論】「ソウル-ベルリン玉突き書簡 第4信 遊び」, 『世界』767号, 岩波書店, pp.178~186 ※共著者: 多和田葉子 ⇒2007『ソウル-ベルリン玉突き書簡』 pp.57~74

08 【評論】「ソウル-ベルリン玉突き書簡 第5信 光」, 『世界』768号, 岩波書店, pp.164~172 ※共著者: 多和田葉子 ⇒2007『ソウル-ベルリン玉突き書簡』 pp.75~93

08 【短文】「[「위대한 왕」이 우리에게 주는 이중의 즐거움 [“偉大な王”が私たちに与える二重の喜び]」, 니콜라이·바이코프『위대한 왕 [偉大な王]』, 아모르문디 [アモールムンディ], ◆頁未詳 *同書の跋文

09 【単著】『시대를 건너는 법: 서경식의 심야통신 [時代を亘る方法: 徐京植の深夜通信]』, 한승동 [ハン・スンドン] 訳, 한겨레출판 [ハンギョレ出版], 333p. *韓国の日刊紙『한겨레』金曜日別冊付録に2005.05~2007.04に隔週連載したコラム「深夜通信」43編と『中央日報』掲載8編の全51編を集成 ⇒日本版2007.10『夜の時代に語るべきこと』

09 【評論】「ソウル-ベルリン玉突き書簡6 声」, 『世界』769号, 岩波書店, pp.244~252 ※共著者: 多和田葉子 ⇒2007『ソウル-ベルリン玉突き書簡』 pp.95~112

10 【単著】『夜の時代に語るべきこと: ソウル発「深夜通信」』, 毎日新聞社, 251p * 2007.09『時代を亘る方法』の日本版

【短文】「はじめに: 「国民主義」に抵抗する」, 同上所収, pp.8~13

10 【評論】「ソウル-ベルリン玉突き書簡 第7信 翻訳」, 『世界』770号, 岩波書店, pp.266~274 ※共著者: 多和田葉子 ⇒2007『ソウル-ベルリン玉突き書簡』 pp.113~130

11 【評論】「ソウル-ベルリン玉突き書簡 第8信 殉教」, 『世界』771号, 岩波書店, pp.282~290 ※共著者: 多和田葉子 ⇒2007『ソウル-ベルリン玉突き書簡』 pp.131~148

12 【共著】『만남: 서경식 김상봉 대담 [出会い: 徐京植・金相奉の対話]』, 돌베개 [トルベゲ], 464p. ※共著=対談者: 김상봉 [キム・サンボン]

12 【論考】「모어와 모국어의 상극: 재일조선인의 언어 경험 [母語と母国語の相克: 在日朝鮮人の言語経験]」, 『황해문화 [黄海文化]』57号, 새얼문화재단 [セオル文化財団], pp.12~45 ⇒2008.11「母語と母国語の相克: 在日朝鮮人の言語経験」, 『人文自然科学論集』126号, 東京経済大学人文自然科学研究会, pp.33~55 ⇒2010『植民地主義の暴力』 pp.195~240

12 【評論】「ソウル-ベルリン玉突き書簡 第9信 故郷」, 『世界』772号, 岩波書店, pp.223~231 ※共著者: 多和田葉子 ⇒2007『ソウル-ベルリン玉突き書簡』 pp.149~

2008年

- 01 【評論】「ソウル-ベルリン玉突き書簡 第10信 最終回 動物」, 『世界』773号, 岩波書店, pp. 337~345 ※共著者: 多和田葉子 ⇒ 2008『ソウル-ベルリン玉突き書簡』 pp. 167~184
- 03 【論考】「토요코오와 서울에서 브리모 레비를 읽는다 [東京とソウルでブリーモ・レーヴィを読む]」, 『창작과 비평 [創作と批評]』139号 (2008年春号), 창작과비평사 [創作と批評社], pp. 397~417 ⇒ 2010『植民地主義の暴力』(改題「記憶の闘い: 東京とソウルで読むブリーモ・レーヴィ」) pp. 259~293
- 03 【随想】「いまも続く死者との対話 <巻頭随筆 一冊の本>」, 『一冊の本』13巻3号 (通号144), 朝日新聞社, pp. 2~4
- 04 【共著】『ソウル-ベルリン玉突き書簡: 境界線上の対話』, 岩波書店, 187p ※共著者: 多和田葉子 * 雑誌『世界』連載 (全10回, 2007.04~2008.01) の同名往復書簡を集成
 【短文】「まえがき」, 同上所収, p. vi
 【短文】「あとがき」, 同上所収, p. 187
 ⇒ 2010.02 『경계에서 춤추다: 서울-베를린, 언어의 집을 부수고 떠난 유랑자들 [境界で踊る: ソウル-ベルリン, 言語という家を壊して去った放浪者たち]』, 서은혜 [ソ・ウネ] 訳, 창작과비평사 [創作と批評社], 240p.

2009年

- 01 【単著】『고통과 기억의 연대는 가능한가?: 국민, 국가, 고향, 죽음, 희망, 예술에 대한 서경식의 이야기 [苦痛と記憶の連帯は可能か?: 国民, 国家, 故郷, 死, 希望, 芸術に対する徐京植の言葉]』, 철수와영희 [チョルスとヨンヒ], 312p. * 韓国での市民を対象とした連続講座の記録
- 05 【単著】『고뇌의 원근법: 서경식의 서양근대미술 기행 [苦悩の遠近法: 徐京植の西洋近代美術紀行]』, 박소현 [パク・ソヒョン] 訳, 들베개 [トルペ게], 369p. ⇒ 日本版 2010.03 『汝の目を信じよ!』
- 08 【対談】【◆表題未詳】『후퇴하는 민주주의: 서른 살, 사회과학을 만나다 [後退する民主主義: 30歳, 社会科学に出会う]』, 철수와영희 [チョルスとヨンヒ], ◆未見 ※対談者: 하종강 [ハ・ジョンガン] 韓国労働問題研究所長
- 08 【発言】「沖繩・九条・天皇・検閲・表現をめぐる: 緊急アートアクション 2009「アトミックサンシャイン」沖繩展の検閲に抗議する! シンポジウムより」, 『인박쇼』

徐京植著作目録

ン』170号, 特集「反天皇制というレジスタンス: その軌跡と展望」, インパクト出版会, pp. 48~61 ※参加者: 大浦信行・比嘉豊光・白川昌生・鷗飼哲・毛利嘉孝(司会) ※徐京植発言箇所: pp. 54~57 ⇒ 2011.08 「[サンシャイン]と[シャドウ]」, 沖縄県立美術館検閲抗議の会編『アート・検閲, そして天皇: 「アトミックサンシャイン」 in 沖縄展が隠蔽したもの』, 社会評論社, pp. 45~50

2010年

- 02 【短文】『野村啓治准教授追悼号の発刊に寄せて』, 『人文自然科学論集』129号, 東京経済大学人文自然科学研究会, pp. 3~4
- 03 【単著】『汝の目を信じよ!: 統一ドイツ美術紀行』, みすず書房, 280p * 1990年代以降の美術関係の著述を集成
- 【短文】「はしがき」, 同上所収, pp. i~ii
- 【短文】「より徹底的に見つめ, より熾烈に創造せよ!: 韓国版序文」, 同上所収, pp. 205~212
- 04 【単著】『植民地主義の暴力: 「ことばの檻」から〈徐京植評論集〉』, 高文研, 316p
- 【論考】「和解という名の暴力: 朴裕河『和解のために』批判」, 同上所収, pp. 63~108
- 【短文】「あとがき」, 同上所収, pp. 313~316
- ⇒ 2011.03 『언어의 감옥에서: 어느 재일조선인의 초상 [言語の監獄で: ある在日朝鮮人の肖像]』, 권혁태 [コン・ヒョクテ] 訳, 돌베개 [トルベゲ], 472p.
- 07 【論考】『홀로코스트의 증인 프리모 레비 [ホロコーストの証人 プリーモ・レーヴィ]』, 한국방송통신대학교 문화교양학과 편 [韓国放送通信大学校文化教養学科編] 『인물로 본 문화 [人物で見る文化]』 韓国放送通信大学校出版部, pp. 199~214 * 同書第10章
- 【論考】「학대받은 민중의 지혜 오기순 [虐待された民衆の知恵 呉己順]」, 同上所収, pp. 221~235 * 同書第11章
- 07 【発言】「近代以後に向かって」, 『インパクション』175号, 特集「終わらない植民地支配: 国境を超える抵抗—沖縄・パレスチナ・グアム・アイヌ」, インパクト出版会, pp. 120~125 * 「ホロコーストとイスラエルを考える: ヤコブ・ラブキン教授『トーラーの名において』邦訳刊行記念シンポジウムから」, 同記念シンポジウム「ホロコーストとイスラエルを考える」(明治大学, 2010.04.18) 第1部シンポジウム発言部分
- 00 【講演】「『한국문학』과 『세계문학』을 둘러싼 단상: 『새로운 보편성』을 찾아서 [『韓国文学』と『世界文学』をめぐる断想: 「新しい普遍性」を求めて]」, 『실천문학 [実践文学]』100号(2010年冬号), 실천문학사 [実践文学社], pp. 273~282 * 韓国作家会議主催シンポジウム「韓国文学と世界文学」(2010.11.05)での報告 ⇒ 2014『詩の力』pp. 163~176

2011年

- 08 【随想】「『魂の重心』という言葉：解説に代えて」, 佐々木孝『原発禍を生きる』, 論創社, pp.255~259 ⇒2012『フクシマを歩いて』 pp.67~70 (副題は削除)
- 11 【単著】『나의 서양음악 순례 [私の西洋音楽巡礼]』, 한승동 [ハン・スンドン] 訳, 창작과비평사 [創作と批評社], 2011. 11, 348p. * 初出:「徐京植の西洋音楽巡礼」, 韓国のインターネット・メディア『나비 [ナビ]』に計33回連載(2010.4.27~2011.08.30) ⇒日本版2012.07『私の西洋音楽巡礼』
- 11 【談話】「나의 글쓰기와 문학 [私の書き物と文学]」, 『실천문학 [実践文学]』104号(2011年冬号), 실천문학사 [実践文学社], pp.40~72 ※聞き手: 서은혜 [ソ・ウネ]

2012年

- 01 【単著】『在日朝鮮人ってどんなひと? 〈中学生の質問箱〉』平凡社, 255p
⇒2012.08 『역사의 증인 제일 조선인: 한일 젊은 세대를 위한 서경식의 바른 역사 강의 [歴史の証人 在日朝鮮人: 韓日の若い世代のための徐京植の正しい歴史講義]』, 형진의 [ヒョン・ジニ] 訳, 반비 [バンビ], 272p.
- 02 【論考】「후쿠시마에서 본 '일본' [福島からみる「日本」]」, 『녹색평론 [綠色評論]』1・2月号, 녹색평론사 [綠色評論社]
- 02 【評論】「反時代적 콜렉션에ひそむ「魔」」, 『音樂現代』42卷2号(通号490), 芸術現代社, pp.128~129
- 03 【単著】『フクシマを歩いて: 디아스포라의 眼から』, 毎日新聞社, 254p. * 韓国の日刊紙『한겨레』2007.05~2011.08に連載したコラム「디아스포라의 眼」その他を集成
【評論】「序にかえて: 地上の有力者たちよ, 新たな毒の主人よ」, 同上所収, pp.7~14
⇒2012.03 『디아스포라의 眼: 서경식 에세이 [디아스포라의 眼: 徐京植エッセイ]』, 한승동 [ハン・スンドン] 訳, 한겨레출판 [한겨레출판], 295p.
- 03 【談話】「越境者にとっての母語と読み書き」, 田中望・春原憲一郎・山田泉編著『生きる力をつちかう言葉: 言語的マイノリティーが〈声を持つ〉ために』, 大修館書店, pp.63~104 ※聞き手: 田中望
- 03 【座談会】「원전과 국가 그리고 민주주의: 후쿠시마 그 이후 1 [原発と国家, そして民主主義: フクシマ以後1]」, 『황해문화 [黄海文化]』74号, 세얼문화재단 [세얼문화재단], pp.250~282 ※参加者: 한홍구 [韓洪九], 다카하시 데즈야 [高橋哲哉] ⇒2013『후쿠시마 이후의 삶 [フクシマ以後の生]』
- 03 【談話】「〈著者インタビュー〉徐京植『在日朝鮮人ってどんなひと?』平凡社」, 『クロワッサン』(03.25), マガジンハウス, p.106

徐京植著作目録

- 06 【座談会】「원전과 국가 그리고 민주주의 : 후쿠시마 그 이후 2 [原発と国家, そして民主主義 : フクシマ以後 2]」, 『황해문화 [黄海文化]』 75 号, 새얼문화재단 [セオル文化財団], pp. 295~322 ※参加者 : 한홍구 [韓洪九], 다카하시 데즈야 [高橋哲哉] ⇒ 2013 『후쿠시마 이후의 삶 [フクシマ以後の生]』
- 07 【單著】『私の西洋音楽巡礼』, みすず書房, 244p. ⇒ 2011. 11 『私の西洋音楽巡礼』의 日本版
【短文】「はしがき」, 同上所収, ノンブルなし冒頭 2p.
- 09 【講演】「特別講義 私の「もの書き」と文学」, 『詩人会議』 50 卷 9 号 (通号 600), 詩人会議, pp. 124~147
- 09 【評論】「빨간 치마 : 궁지 높은 '촌놈' 화가 신경호 [赤いスカート : 誇り高い「田舎者」画家 シン・ギョンホ (申晁浩)]」, 『황해문화 [黄海文化]』 76 号, 새얼문화재단 [セオル文化財団], pp. 285~328 ⇒ 2014 『私の朝鮮美術巡礼』 = 2015 『越境画廊』 (改題「誇り高い田舎者 : シン・ギョンホ」) pp. 13~59
- 11 【談話】「「以後」に現れる「以前」 : フクシマと東アジア」, 『批評研究』 1 号, 特集「以後の思想」, 論創社, pp. 4~15
- 12 【評論】「우아한 미친년 : 윤석남 [優雅なマッド・ウーマン : 윤·ソンナム (尹錫男)]」, 『황해문화 [黄海文化]』 77 号, 새얼문화재단 [セオル文化財団], pp. 303~340 ⇒ 2014 『私の朝鮮美術巡礼』 = 2015 『越境画廊』 pp. 61~104

2013 年

- 02 【講演】「「証言不可能性」の現在 : 아우슈ヴィッツとフクシマを結ぶ想像力」, 『現代法学』 23・24 合併号, 東京経済大学現代法学会, pp. 99~120 * 全南大学主催第 6 回「後廣金大中学術賞」授賞式での記念講演 (全南大学, 2012. 07. 23) ⇒ 2014 『詩の力』 pp. 213~245
- 03 【共著】『후쿠시마 이후의 삶 : 역사, 철학, 예술로 3.11 이후를 성찰하다 [フクシマ以後の生 : 歴史, 哲学, 芸術から 3・11 以後を省察する]』, 이령경 [イ・リョンギョン] 訳, 반비 [반비], 266p. ※共著 = 鼎談者 : 다카하시 데즈야 [高橋哲哉], 한홍구 [韓洪九] ⇒ 日本版 2014. 02 『フクシマ以後の思想をもとめて』
- 03 【講演】「詩が映し出す東アジア近現代史」, 『詩人会議』 51 卷 3 号 (通号 606), 詩人会議編, pp. 81~111 * 詩人会議創立 50 周年記念講演
- 03 【評論】「완고한 맏아들 : 정연두 [頑固な長男 : 정연두 (鄭然斗)]」, 『황해문화 [黄海文化]』 78 号, 새얼문화재단 [セオル文化財団], pp. 319~344 ⇒ 2014 『私の朝鮮美術巡礼』 = 2015 『越境画廊』 pp. 105~146
- 05 【共著】『경계에서 만나다 : 디아스포라와의 대화 [境界で出会う : 디아스포라와의 대화]』

- 話』, 현암사 [玄岩社], 292p. ※共著者: 김용규 [キム・ヨング], 이용일 [イ・ヨンイル], 서민정 [ソ・ミンジョン]
- 08 【座談会】「鄭周河 (チョン・ジュハ) 写真展・オープニングトーク 奪われた野にも春は来るか」, 『詩人会議』51巻8号 (通号611), 詩人会議, pp.64-85 ※参加者: 鄭周河・高橋哲哉
- 09 【評論】「분열을 진지하게 체현한 전설의 '월북화가': 이쾌대 [分裂を真っ向から体現した伝説の「越北画家」: イ・クエデ (李快大)]」, 『황해문화 [黄海文化]』80号, 새얼문화재단 [セオル文化財団], pp.243~264 ⇒2014『私の朝鮮美術巡礼』=2015『越境画廊』(改題「分裂というコンテキスト: イ・クエデ」) pp.233~278
- 12 【講演】「『国民主義』を超える社会へ: 在日朝鮮人ってどんな人?」, 『同和教育石川: 人権啓発資料』53号, 石川県同和教育研究協議会, pp.1~22 *第23回石川県同和教育研究大会記念講演 (2013.08.22)
- 12 【書評】「疑問形の希望: 斎藤貢詩集『汝は, 塵なれば』に寄せて」, 『福島民報』12.29, p.3

2014年

- 01 【講演】「アジアと向き合うことの意味: 憲法問題に対する一在日朝鮮人の発言」上, 『詩人会議』52巻1号 (通号616), 詩人会議, pp.66~84
- 01 【随想】「異才の音楽評論家, 美術コレクターの河野保雄さんを悼む」, 『音楽現代』44巻1号 (通号513), 芸術現代社, pp.152~153
- 02 【共著】『フクシマ以後の思想をもとめて: 日韓の原発・基地・歴史を歩く』, 平凡社
※共著=鼎談者: 高橋哲哉・韓洪九, 翻訳: 李吟京・金英丸・趙真慧 ⇒2013.03『フクシマ以後の生』の日本版
【評論】「序 再生か更生か: 3・11以後が問うているもの」, 同上所収, pp.5~11
- 02 【講演】「アジアと向き合うことの意味: 憲法問題に対する一在日朝鮮人の発言」下, 『詩人会議』52巻2号 (通号617), 詩人会議, pp.94~101
- 02 【短文】「2013年読書アンケート」, 『みすず』623号 (1・2月合併), みすず書房, pp.31~33
- 03 【評論】「이름이 많은 아이: 미희 [名前の多い子ども: ミヒ]」, 『황해문화 [黄海文化]』82号, 새얼문화재단 [セオル文化財団], pp.270~295 ⇒2014『私の朝鮮美術巡礼』=2015『越境画廊』(改題「いくつもの名をもつ子: ミヒ=ナタリー・ルモワンヌ」) pp.189~232
- 05 【単著】『詩の力: 「東アジア」近代史の中で〈徐京植評論集Ⅱ〉』, 高文研, 256p
【講演】「私はなぜ「もの書き」になったのか」, 同上所収, pp.10~52 *淑明女子大

学韓国語文学科講演 (2011.09.14), 原題「私の「もの書き」と文学」

【詩】『詩集 八月』1968年私家版, ※筆名: 朴日浩, 同上所収, pp.53~87

【講演】「詩の力 (第1部 魯迅と中野重治, 第2部 朝鮮の詩が映し出す近現代史)」, 同上所収, pp.89~161 * 「詩人会議創立50周年の集い」講演 (日本青年会館, 2012.12.08) に大幅加筆

【講演】「越境者にとっての母語と読み書き: ある在日朝鮮人一世女性の経験から」, 同上所収, pp.177~211 * 釜山大学人文学研究所主催学術講演 (2012.06.07) に加筆

【短文】「「後ろ向き人間」の抵抗: あとがきに代えて」, 同上所収, pp.247~253
⇒2015.07 『시의 힘: 절망의 시대, 시는 어떻게 인간을 구원하는가 [詩の力: 絶望の時代, 詩はいかにして人を救うのか]』, 서은혜 [ソ・ウネ] 訳, 현암사 [玄岩社], 296p.

06 【評論】「조선 미술의 이단아: 혜원 신윤복 [朝鮮美術の異端児: 蕙園シン・ユンボク (申潤福)]」, 『황해문화 [黄海文化]』83号, 새일문화재단 [セオル文化財団], pp.348~373
⇒2014『私の朝鮮美術巡礼』=2015『越境画廊』(改題「性別すら超えた異端の天才: シン・ユンボク」) pp.147~188

09 【単著】『新版 プリーモ・レーヴィへの旅: アウシュヴィッツは終わるのか?』, 晃洋書房, 292p * 旧版 (1999.08, 朝日新聞社) を第I部とし, 書き下ろしを付加

【短文】「アウシュヴィッツは終わるのか?: 若い読者へのまえがき」, 同上所収, pp.i~vi

【評論】「第II部 その後, 三たびのトリノ」, 同上所収, pp.237~275

10 【随想】「カラヴァッジョのローマ: イタリアを旅して」, 『こころ』21号, 平凡社, p.46~58

11 【単著】『나의 조선미술 순례 [私の朝鮮美術巡礼]』, 최재혁 [チェ・ジェヒョク] 訳, 반비 [バンビ], 386p. * 韓国の季刊雑誌『黄海文化』76号 (2012年秋) ~83号 (2014年夏) に全6回連載した「우리/美術巡礼」に加筆 ⇒日本版2015.10『越境画廊』

2015年

01 【随想】「〈新春に寄せて〉恥」, 『詩人会議』53巻1号 (通号628), 詩人会議, pp.40~42

02 【短文】「2014年読書アンケート」, 『みすず』634号 (1・2月合併), みすず書房, pp.68~69

05 【対談】「제국과 놀다 / 제국을 놀리다: 잉카 쇼니바레와의 대담 [帝国と遊ぶ/帝国を弄ぶ: インカ・シヨニヴァレとの対談]」, 최재혁 [チェ・ジェヒョク] 訳, 『잉카 쇼니바레 MBE: 찬란한 정원으로 [インカ・シヨニバ레 MBE: きらびやかな庭へ]』, 대구미술관 [大邱美術館] ※対談者: インカ・シヨニバ레

- 07 【短文】「인간이란 무엇인가 [人間とは何か?]', 山際寿一『폭력은 어디서 왔다 [暴力はどこから来たのか]』, コム出版, pp.4~6 *同書への推薦文
- 08 【単著】『내 서재 속 고전: 나를 건디게 해준 책들 [私の書齋の中の古典: 私に耐える力をくれた本たち]』, 한승동 [ハン・スンドン] 訳, 나무연필 [木の鉛筆], 272p. *韓國の日刊紙『한겨레』2013.05.19~2015.03.05における計16回の連載「私の書齋の中の古典」を集成(ただし3編は書き下ろし) ⇒日本版2016.04『抵抗する知性のための19講』
- 08 【共編著】『奪われた野にも春は来るか: 鄭周河写真展の記録』, 高文研, 368p *共編者: 高橋哲哉
 【短文】「はじめに: 本書発刊の経緯と意図など」, 同上所収, pp.10~13
 【短文】「あとがき」, 同上所収, pp.362~365
 ⇒2016.03『다시 후쿠시마를 마주한다는 것: 후쿠시마와 식민주의, 후쿠시마와 연대, 후쿠시마와 예술 [再び福島と向き合うということ: 福島と植民地主義, 福島と連帯, 福島と芸術]』, 형진의 [ヒョン・ジニ] 訳, 반비 [バンビ], 359p.
- 09 【談話】「인터뷰 徐京植さんに聞く 詩の力について」上, 『詩人会議』53巻9号(通号636), 詩人会議, pp.64~83 *聞き手: 秋村宏
- 10 【単著】『越境画廊: 私の朝鮮美術巡礼』, 論創社, 292p ⇒2014.11『私の朝鮮美術巡礼』の日本版
- 10 【講演】「[ことばの力]: 対話の危機をどう乗り越えるか」, 『同和教育石川: 人権啓発資料』57号, 石川県同和教育研究協議会, pp.1~19 *第25回石川県同和教育研究大会記念講演(2015.08.20)
- 10 【談話】「인터뷰 徐京植さんに聞く 詩の力について」下, 『詩人会議』53巻10号(通号637), 詩人会議, pp.74~91 *聞き手: 秋村宏
- 10 【論考】「他者認識の欠落: 安保法制をめぐる動きに触れて」, 『現代思想』43巻14号臨時増刊, 総特集「安保法案を問う」, 青土社, pp.144~149 ⇒2017『日本リベラル派の頹落』pp.15~26(うち「解題」p.16)

2016年

- 01 【対談】「トーク 他者の声: 『奪われた野にも春は来るか 鄭周河写真展の記録』刊行記念」, 『詩人会議』54巻1号(通号640), 詩人会議, pp.64~85 *対談者: 高橋哲哉
- 02 【短文】「2015年読書アンケート」, 『みすず』645号(1・2月合併), みすず書房, pp.77~79
- 03 【書評】「人間を「家畜化する」あの場所で冷徹に人間を観察: プリーモ・レーヴィ著『リリス』」, 『図書新聞』3248号(03.26), p.4

- 04 【単著】『抵抗する知性のための 19 講：私を支えた古典』, 晃洋書房, 161p. ⇒ 2015. 08
『私の書齋の中の古典』の日本版
【短文】「はじめに：人間の断片化に抵抗する」, 同上所収, pp. i~vii
- 04 【論考】「日本知識人の覚醒を促す：和田春樹先生への手紙」, 前田朗編『「慰安婦」問題
の現在：「朴裕河現象」と知識人』, 三一書房, pp. 168~209 ⇒ 2017『日本リベラル派の
頽落』 pp. 125~196 (うち「解題」 pp. 126~127)
- 08 【論考】「憲法 9 条, その先へ：「朝鮮病」患者の独白」, 『詩人会議』 54 卷 8 号 (通号
647), 詩人会議, pp. 66~75 ⇒ 2017『日本リベラル派の頽落』 pp. 27~43 (うち「解題」
p. 28)
- 10 【評論】「〈地下室の窓〉緑はよみがえる」, 『詩人会議』 54 卷 10 号 (通号 649), 詩人会
議, pp. 98~101
- 11 【講演】「폭력과 기억의 싸움: 이해할 수 있을 때까지 멈추지 말아야 한다 [暴力と記憶の闘
い: 理解できる時まで留まってはならない]」, 『치유의 인문학 [治癒の人文科学]』, 위즈덤하
우스 [ウィズダムハウス], ◆頁未詳 * 韓国のトラウマ・センターでの講演 (2013 年)
の記録
- 11 【解説】「ひとつの応答：魯迅を補助線として」, 辺見庸『完全版 1★9★3★7 (イクミ
ナ)』下, 角川文庫, pp. 240~269 ⇒ 2017『日本リベラル派の頽落』 pp. 45~68 (改題
「梟蛇鬼怪といえども……: 辺見庸『完全版 1★9★3★7』への応答」)
- 12 【評論】「〈地下室の窓〉死の山々の連なり」, 『詩人会議』 54 卷 12 号 (通号 651), 詩人
会議, pp. 112~116
- 00 【論考】「'우리 시대'의 우수를 응시하다 [「私たちの時代」の秀逸を見つめる]」, 최재혁
[チェ・ジェヒョク] 訳, 『언저리의 미학: 윌리엄 켄트리지, 주변적 고찰 [周辺的美学: ウィ
リアム・ケントリッジ, 周辺の考察]』, 수류산방 / 국립현대미술관 [水流山房 / 国立現代美
術館]

2017 年

- 02 【評論】「〈地下室の窓〉奴隷主の心性：「1★9★3★7 (イクミナ)」を読む」, 『詩人会議』
55 卷 2 号 (通号 653), 詩人会議, pp. 102~105
- 02 【短文】「2016 年読書アンケート」, 『みすず』 656 号 (1・2 月合併), みすず書房,
pp. 38~41
- 02 【座談会】「鄭周河写真展の記録 韓国語版出版記念会トーク ふたたび福島に向き合う」
上, 『詩人会議』 55 卷 2 号 (通号 653), 詩人会議, pp. 84~97 ※参加者：韓洪九・鄭周
河
- 03 【単著】『다시, 일본을 생각한다: 퇴락한 반동기의 사상적 풍경 [再び, 日本を考える: 頽落

- した反動期の思想的風景』, 한승동 [ハン・スンドン] 訳, 나무연필 [木の鉛筆], 324p.
⇒日本版 2017. 11 『日本リベラル派の頹落』
- 03 【座談会】「鄭周河写真展の記録 韓国語版出版記念会トーク ふたたび福島に向き合う」
下, 『詩人会議』 55 卷 3 号 (通号 654), 詩人会議, pp. 76~90 ※参加者: 韓洪九・鄭周河
- 04 【評論】「〈地下室の窓〉善きアメリカ」, 『詩人会議』, 55 卷 4 号 (通号 655), 詩人会議,
pp. 98~102
- 06 【評論】「〈地下室の窓〉アレクシェーヴィッチ」, 『詩人会議』, 55 卷 6 号 (通号 657),
詩人会議, pp. 104~107
- 08 【論考】「추천의 말 “국체, 외면하고 싶어지는 말” [推薦の言葉「國體, 目を背けたくなる
言葉]]」, 형진의 [ヒョン・ジニ]・임경화 [임・ギョンファ] 訳, 一橋大学大学院言語
社会研究科韓国学研究中心 『일본 신민족주의 전환기에 「국체의 본의」를 읽다 [日本新
民族主義転換期に「國體の本義」を読む]]」, 어문학사 [語文学社], pp. 5~17
- 08 【論考】「フクシマ以後の生を考える: 少数者の立場から」, 『詩人会議』 55 卷 8 号 (通
号 659), 詩人会議, pp. 70~93
- 09 【評論】「〈地下室の窓〉来るところまで来た」, 『詩人会議』 55 卷 9 号 (通号 660), 詩人
会議, pp. 96~99
- 11 【単著】『日本リベラル派の頹落 (徐京植評論集Ⅲ)』, 高文研, 437p ⇒韓国版 2017. 03
『再び, 日本を考える』の日本版
【短文】「日本リベラル派の頹落: 「序」にかえて」, 同上所収, pp. 5~12
【講演】「あいまいな日本と私」, 同上所収, pp. 69~104 *韓国日本学会総会シンポジ
ウム「東アジアのマイノリティと日本研究」基調講演 (高麗大学, 2017. 02. 18)
【講演】「ヨーロッパ普遍主義と日本的普遍主義」, 同上所収, pp. 105~123 *国際学
会「Between two oceans: Latin America, Europe, Africa and Asia」での講演 (コスタリ
カ大学, 2016. 03. 16), 原題「新たな普遍主義への希求」
【講演】「国家・故郷・家族・個人: 「パトリオティズム」を考える」, 同上所収,
pp. 197~227 *全南大学湖南学研究院主催学会「Patriotisms: Love as Political Passion」,
2014. 06. 13), 原題「パトリオティズム再考: ディアスポラの視点から」
【講演】「のちの時代の人々に: 再び在日朝鮮人の進む道について」, 同上所収, pp. 229
~254 *コリア NGO センター主催講演会「戦後 70 年, 歴史認識を考える視座」講演
(ネット・カンファレンス新大阪, 2014. 05. 30)
【短文】「おわりに」, 同上所収, pp. 433~437
- 11 【評論】「〈地下室の窓〉記憶の虐殺者たち」, 『詩人会議』 55 卷 11 号 (通号 662), 詩人
会議, pp. 100~103

2018 年

- 01 【単著】『나의 이탈리아 인문 기행 [私のイタリア人文紀行]』, 최재혁 [チェ・ジェヒョク] 訳, 반비 [バンビ], 348p. ⇒日本版 2020.05 『メドゥーサの首』
- 01 【評論】「〈地下室の窓〉民主主義の廃墟：大量消費の果てに」, 『詩人会議』 56 卷 1 号 (通号 664), 詩人会議, pp.92~95
- 02 【短文】「2017 年読書アンケート」, 『みすず』 667 号 (1・2 月合併), みすず書房, pp.105~106
- 03 【評論】「〈地下室の窓〉まだ忘れてよい時ではない！：尹伊桑生誕 100 周年」, 『詩人会議』 56 卷 3 号 (通号 666), 詩人会議, pp.86~90
- 04 【短文】「「一本の木が…」：新図書館長からのメッセージ」, 『TKU LIBRARY NEWS : 図書館だより』 4 号, 東京経済大学図書館, pp.1~2
- 06 【評論】「〈地下室の窓〉ネルーダは死なず」, 『詩人会議』 56 卷 6 号 (通号 669), 詩人会議, pp.92~95
- 07 【論考】「予兆と齟齬：シェーンベルクとカンディンスキー」, 『女性・戦争・人権』 16 号, 「女性・戦争・人権」学会学会誌編集委員会編／行路社発行, pp.98~113
- 07 【評論】「〈地下室の窓〉21 世紀の東アジアでミケランジェロを想う」, 『詩人会議』 56 卷 7 号 (通号 670), 詩人会議, pp.62~65
- 08 【講演】「私と美術, 生きること：荻原礫山, 高田博厚, ゴッホ」上, 『詩人会議』 56 卷 8 号 (通号 671), 詩人会議, pp.50~61
- 09 【共著】『責任について：日本を問う 20 年の対話』, 高文研, 261p. ※共著=対談者：高橋哲哉
【短文】「はじめに」, 同書所収, pp.1~2
【論考】「日本型全体主義の完成」, 同書所収, pp.257~261
⇒2019.08 『책임에 대하여：현대 일본의 본성을 묻는 20 년의 대화 [責任について：現代日本の本性を問う 20 年の対話]』, 한승동 [ハン・スンドン] 訳, 돌베개 [トルペゲ], 320p.
- 09 【講演】「私と美術, 生きること：荻原礫山, 高田博厚, ゴッホ」下, 『詩人会議』 56 卷 9 号 (通号 672), 詩人会議, pp.56~67
- 10 【評論】「〈地下室の窓〉嵐の海に臨んで宮城と徳を想う」, 『詩人会議』 56 卷 10 号 (通号 673), 詩人会議, pp.86~88
- 11 【解説】「한국어판 출간에 부쳐: ‘마지막 지식인’의 광휘 [韓国語版 出版に寄せて:「最後の知識人」の輝き]」, 가토 슈이치 [加藤周一] 『언어와 탱크를 응시하여 [言葉と戦車を見すえて]』, 서은혜 [ソ・ウニエ] 訳, 돌베개 [石枕], ◆頁未詳 *加藤周一 (小森陽一・成田龍一編) 『言葉と戦車を見すえて：加藤周一が考えつづけてきたこと』 (筑摩書房〈ちくま学芸文庫〉, 2009.08) 韓国版解説

- 12 【評論】「〈地下室の窓〉両手を広げて迎え入れよ」, 『詩人会議』56巻12号(通号675), 詩人会議, pp.110~113

2019年

- 01 【対談】「責任について：日本を問う20年」, 『詩人会議』57巻1号(通号676), 詩人会議, pp.62~78 ※対談者：高橋哲哉
- 02 【短文】「2018年読書アンケート」, 『みすず』678号(1・2月合併), みすず書房, pp.70~71
- 03 【評論】「〈地下室の窓〉まだ生きているぞ：闇に刻む光」, 『詩人会議』57巻3号(通号678), 詩人会議, pp.92~95
- 05 【評論】「〈地下室の窓〉長い列：独立運動100周年に見た2本の映画」, 『詩人会議』57巻5号(通号680), 詩人会議, pp.88~91
- 07 【評論】「〈地下室の窓〉「図書館の時間」を取り戻す」, 『詩人会議』57巻7号(通号682), 詩人会議, pp.76~80
- 08 【単著】『나의 영국 인문 기행 [私のイギリス人文紀行]』, 최재혁 [チェ・ジェヒョク] 訳, 반비 [バンビ], 296p. ⇒日本版 2021.02『ウーズ河畔まで』
- 11 【評論】「〈地下室の窓〉終末はこのように来る」, 『詩人会議』57巻11号(通号686), 詩人会議, pp.92~94
- 12 【評論】「'국경'의 풍경：몇 가지 단상 [「国境」の風景：いくつかの断想]」, 『오늘의 문예비평 [今日の文芸批評]』115号(2019年冬号), pp.88~108

2020年

- 02 【短文】「2019年読書アンケート」, 『みすず』689号(1・2月合併), みすず書房, pp.76~77
- 04 【評論】「〈地下室の窓〉歯が外れた：2020年の年頭所感01」, 『詩人会議』, 58巻4号(通号691), 詩人会議, pp.82~85
- 05 【単著】『메도우사의首：私のイタリア人文紀行』, 論創社, 184p. ⇒2018.01『私のイタリア人文紀行』の日本版
- 06 【評論】「서경식 교수의 일본근대미술순례 1 나카무라 쓰네：〈두개골을 든 자화상〉 [徐京植教授の日本近代美術巡礼1 中村彝：〈頭蓋骨を持てる自画像]」, 최재혁 [チェ・ジェヒョク] 訳, 『월간미술 [月刊美術]』425号, 月刊美術社, pp.62~69
- 06 【評論】「〈地下室の窓〉死の勝利」, 『詩人会議』58巻6号(通号693), 詩人会議, pp.88~91
- 08 【評論】「서경식 교수의 일본근대미술순례 2 사에키 유조 I：〈러시아 소녀〉 [徐京植教授の

徐京植著作目録

- 日本近代美術巡礼 2 佐伯祐三 I :〈ロシアの少女〉], 최재혁 [チェ・ジェヒョク] 訳, 『월간미술 [月刊美術]』 427号, 月刊美術社, pp. 62~65
- 10 【評論】「서경식 교수의 일본근대미술순례 3 사에키 유조 II :〈러시아 소녀〉 [徐京植教授の日本近代美術巡礼 3 佐伯祐三 II :〈ロシアの少女〉], 최재혁 [チェ・ジェヒョク] 訳, 『월간미술 [月刊美術]』 429号, 月刊美術社, pp. 66~69
- 10 【評論】「〈地下室の窓〉 디스토피아와 藝術의 力」, 『詩人會議』 58卷 10号 (通号 697), 詩人會議, pp. 78~81
- 12 【評論】「서경식 교수의 일본근대미술순례 4 세키네 쇼지 :〈신앙의 슬픔〉 [徐京植教授の日本近代美術巡礼 4 関根昭二 :〈信仰の悲しみ〉], 최재혁 [チェ・ジェヒョク] 訳, 『월간미술 [月刊美術]』 431号, 月刊美術社, pp. 76~79

2021 年

- 02 【單著】『우즈河畔まで : 私のイギリス人文紀行』, 論創社, 168p. ⇒ 2019.08 『私のイギリス人文紀行』の日本版
- 02 【評論】「서경식 교수의 일본근대미술순례 5 아이 미쓰 :〈눈이 있는 풍경〉 [徐京植教授の日本近代美術巡礼 5 巖光 :〈眼のある風景〉], 최재혁 [チェ・ジェヒョク] 訳, 『월간미술 [月刊美術]』 433号, 月刊美術社, pp. 64~69
- 02 【評論】「〈地下室の窓〉 米国の「断末魔」は続く」, 『詩人會議』 59卷 2号 (通号 701), 詩人會議, pp. 84~87
- 03 【論考】「真の和解のために : 日朝両民族の歴史的関係から考える」上, 『詩人會議』 59卷 3号 (通号 702), 詩人會議, pp. 78~89
- 04 【論考】「真の和解のために : 日朝両民族の歴史的関係から考える」下, 『詩人會議』 59卷 4号 (通号 703), 詩人會議, pp. 70~80
- 04 【評論】「서경식 교수의 일본근대미술순례 6 오기와라 로쿠잔 :〈광부〉 [徐京植教授の日本近代美術巡礼 6 萩原碌山 :〈坑夫〉], 최재혁 [チェ・ジェヒョク] 訳, 『월간미술 [月刊美術]』 435号, 月刊美術社, pp. 66~71
- 06 【共著】『アレクシエーヴィチとの対話 : 「小さき人々」の声を求めて』, 岩波書店, 380p. ※共著者 : 스ヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ, 鎌倉英也, 沼野恭子
- 【対談】「「小さき人々」の声を聞く : 暴力と破滅の 20 世紀を見据えて」, 同上所収, pp. 230~253 ※対談者 : 스ヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ * NHK 教育 TV 番組「〈ETV2000〉破滅の 20 世紀 : 스ヴェトラーナ・アレクシエーヴィチと徐京植」(「前編 : 小さき人々 忘却からの証言」 「後編 : 小さき人々 未来への証人」 2000.09.04~05 放送) に基づく
- 【対談】「「小さき人々」の愛を信じる : 21 世紀の苦悩の底から」, 同上所収, pp. 254~

276 ※対談者：スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ * NHK 教育 TV 番組「〈こころの時代〉「小さき人々」の声を求めて スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ」(2017.04.09 放送)に基づく

【論考】「長い道：スヴェトラナ・アレクシエーヴィチさんへの手紙」, 同上所収, pp. 277~306

06 【評論】「서경식 교수의 일본근대미술순례 7 노다 히데오 I : 〈노지리 호숫가의 꽃〉〔徐京植教授の日本近代美術巡礼 7 野田英夫 I : 〈野尻の花〉〕」, 최재혁 [チェ・ジェヒョク] 訳, 『월간미술 [月刊美術]』 437 号, 月刊美術社, pp. 66~69

07 【評論】「〈地下室の窓〉無慈悲な時代：日本から送る連帯の手紙」, 『詩人会議』 59 卷 7 号 (通号 706), 詩人会議, pp. 80~83

08 【評論】「서경식 교수의 일본근대미술순례 8 노다 히데오 II : 〈노지리 호숫가의 꽃〉〔徐京植教授の日本近代美術巡礼 8 野田英夫 II : 〈野尻の花〉〕」, 최재혁 [チェ・ジェヒョク] 訳, 『월간미술 [月刊美術]』 439 号, 月刊美術社, pp. 72~75

10 【評論】「서경식 교수의 일본근대미술순례 9 마쓰모토 슌스케 I : 〈변경에서 태어난 근대적 자아〉〔徐京植教授の日本近代美術巡礼 9 松本竣介 I : 辺境に生まれた近代的自我〕」, 최재혁 [チェ・ジェヒョク] 訳, 『월간미술 [月刊美術]』 441 号, 月刊美術社, pp. 94~97

10 【評論】「〈地下室の窓〉東京五輪, ワクチン, そして生きるために必要な連帯」, 『詩人会議』 59 卷 10 号 (通号 709), 詩人会議, pp. 98~101

11 【評論】「「人生の秋」を迎えている一人の在日同胞として」, 『詩人会議』 59 卷 11 号 (通号 710), 詩人会議, pp. 45~48

12 【評論】「서경식 교수의 일본근대미술순례 10 마쓰모토 슌스케 II : 〈변경에서 태어난 근대적 자아〉〔徐京植教授の日本近代美術巡礼 10 松本竣介 II : 辺境に生まれた近代的自我〕」, 최재혁 [チェ・ジェヒョク] 訳, 『월간미술 [月刊美術]』 443 号, 月刊美術社, pp. 80~83

以上